

ギリシアにおける初期鉄器時代の遺跡 (1) アテネのアゴラ

高橋裕子

はじめに

ギリシアの初期鉄器時代に関しては、近年新しい資料や研究業績が陸続と発表されている¹⁾。それに反して本邦においては未だ本格的な研究が行われているとは見なしえない状況にあり、欧米学界とのレヴェルの差はますます開きつつあるといっても過言ではない。時代全体のダイナミックな流れを意識しながらも、あくまで資料に立脚した詳細な考察が必要不可欠であることは自明のことからであるにもかかわらず、管見の限り、それが満足に行われている邦語文献は目下のところ存在しない。今後わが国においてこの時代の研究が発展していくためには、基礎知識の充実と

もに個々の遺跡や資料を十分に掌握した緻密な分析を志すことが肝要である。

わが国におけるかかる状況に鑑みて、該期の研究史上とりわけ大きな役割を果たしてきた幾つかの遺跡に関して基礎から見なおす作業を試みたい。その第一歩として、本稿においてはアテネのアゴラを取り上げる。というのも一九世紀以来の研究史において他の地域に先がけて多量の資料を提供してきたのがアテネ中心部であり、その中でもアゴラは最高度の重要性を保持してきた遺跡であるからである。

ここで予想されることは土器の編年体系の確立や埋葬習慣の分析という観点から言えば、アテネ中心部の遺跡でも

むしろケラメイコスを取扱うべきではないかという意見である。確かにそれも一理あるが、ケラメイコスの場合は出土遺構が墓に偏っているのに対して、アゴラからは墓以外の資料も出土している。したがってアゴラを紹介する方が該期の社会に関して多少なりとも多様な具体像を提供することが可能となる。またケラメイコスについては時代やテーマごとに体系的な報告書が刊行されているため、出土資料の掌握が比較的行いやすい。逆にアゴラに関しては、まとまった報告も存在するが、しかし現在の資料状況においてはそれだけでは十分ではなく、年度ごとの発掘報告の中から初期鉄器時代関連の資料を抽出していく地道な作業が求められる。したがってケラメイコスに比べてはるかに全体像を把握しづらい。

これらのことを勘案し、本稿においてはアテネ中心部の遺跡の中でもアゴラに焦点を当て、資料を紹介していきたい。

1

述べるまでもなくアゴラという遺跡名は、この場所が古典期において市民生活に重要な役割を果たしたアゴラ（いわゆる「古典期のアゴラ」）が設営されたことに由来する。

この地にアゴラが成立する以前には、その前身とも言うべき別のアゴラ（いわゆる「旧アゴラ」または「前古典期のアゴラ」）が他の場所に存在した。旧アゴラの位置は長らく不明であったが、近年の研究においてはおそらくアクロポリスの北東部または東部の麓であったと推測されている^②。それが何らかの理由により移転され、古典期のアゴラが建設された。その移転の時期、すなわち古典期のアゴラ

が成立した年代に関しては従来前六世紀と考えられてきた^③が、最近では前五〇〇年前後または前四八〇年のペルシヤ軍による破壊のあとと見なす研究者も現われ、むしろ年代を下げる意見が有力になりつつあるとも言えよう。古典期のアゴラがいつ（そしてどのように）成立したのかという問題は、アテナイというポリスの形成や発展とも密接に関連した課題であるためにさまざまに論じられてきたが、未だ多くの議論が必要である^④。

ただしこの遺跡の歴史は、アゴラの成立よりもはるかに古く遡ることが確認されている。中でも豊富な資料が出土している後期青銅器時代に関しては、四〇基を上回る墓が発見されていることで知られている。墓のタイプは該期の一般的な習慣にたがわず半数以上が複数の遺体を葬る岩室墓であり、それ以外は被葬者が一人の単葬墓であった^⑤。近隣のアクロポリスからは城壁をはじめとしてミケーネ時

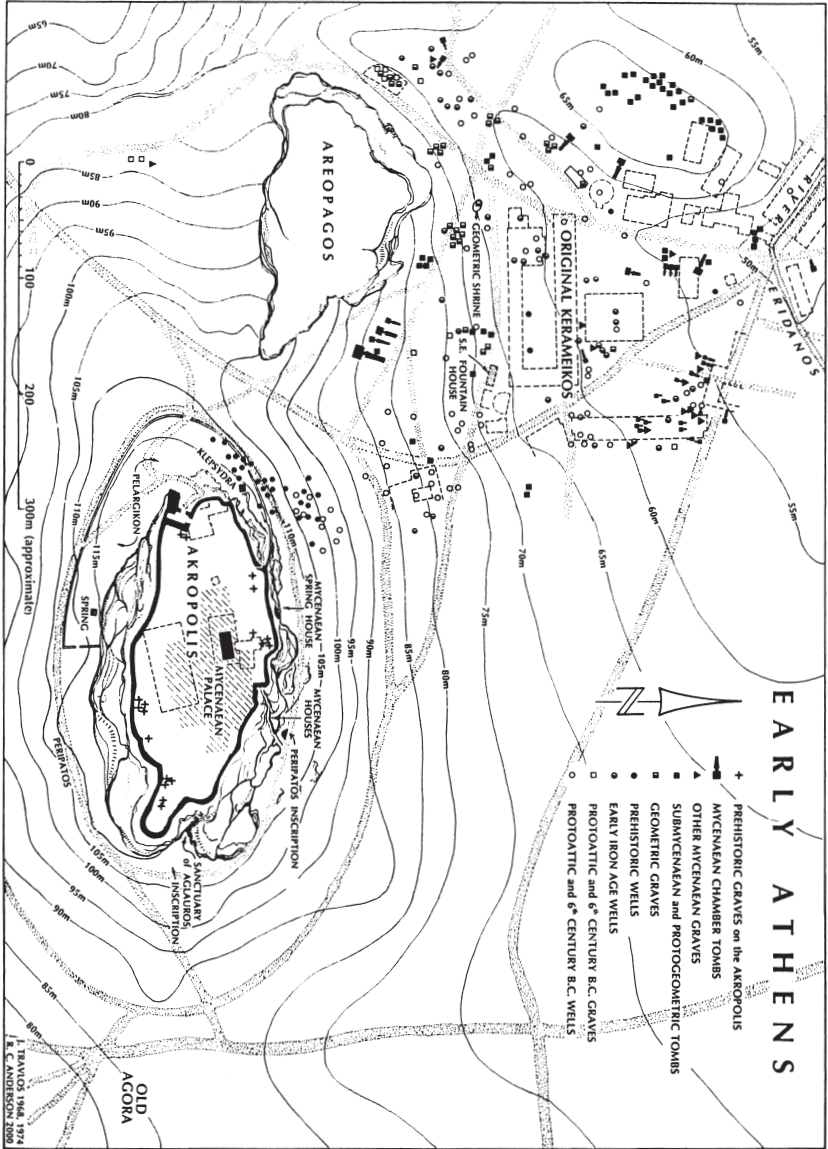


図1 アゴラおよびアクロポリス一帯の遺構分布図

(■ 亜ミケーネ期および原幾何学文様期の墓、■ 幾何学文様期の墓、● 初期鉄器時代の井戸)

ギリシアにおける初期鉄器時代の遺跡(1) アテネのアゴラ(高橋)

代の遺構や遺物が出土しておりアテネ中心部の隆盛が推察されているが、アゴラは該期における周辺一帯を代表する大墓域であった。

続く初期鉄器時代に関してはこれから詳しく見ていくこととするが、あらかじめ一つだけ文献を紹介しておきたい。それはJ・K・パドプロスのアゴラにおける土器製作に関する報告書である。土器の製造に関する資料のみならず、この著作にはアゴラやアクロポリスなどアテネ中心部における初期鉄器時代の墓や井戸の最新の分布図が掲載されている上に、トポグラフィに関する知見も盛り込まれた多角的な議論が展開されている。目下のところ初期鉄器時代に関するアゴラの総合的な時代像を把握するに際して必要不可欠な業績であると同時に、該期の研究全体の中でも最も重要な文献の一つに数えられるであろう。

ところで本稿においては厳密にアゴラのみ資料に限定せず、アレイオス・バゴスなど周辺地域から出土した資料をも含めて紹介することとする。というのも初期鉄器時代においてはそれら周辺一帯が一つのまとまった性格を有しており、合わせて検討対象とする方が明らかに有益であるからである。本稿においてアゴラと記す場合には、かかる意味あいが含まれていることを明記しておきたい。なお墓や副葬品など埋葬資料のデータおよび文献は表にまとめて

あるので、適宜参照されたい。

最後に、アゴラに関しては初期鉄器時代の報告書が予告されている^⑩。それが出版されたあかつきには、おそらくとりわけ埋葬資料に関して、本稿の内容は大幅に修正を迫られる可能性が大きい。したがって本稿はあくまでも執筆時点における公表資料に基づくものであることを強調しておきたい。

それでは以下、墓、副葬品、井戸、建築遺構、墓所祭祀の順に見ていくこととしよう。

2

① 墓

アゴラで発掘された初期鉄器時代の遺構の中で、調査の最初期以来何よりも注目を集めてきたものはやはり墓であろう。筆者が確認しただけでも一〇〇基前後が発掘されており、未発表のものや後代に破壊されたものを考慮に入れるならば実際にはそれをはるかに上回る数が存在したことに疑念の余地はない(表1および図1)。まさに初期鉄器時代におけるギリシア世界有数の大規模な埋葬地であった。

これらのアゴラの墓は、幾つかの区域に分かれていたことがJ・K・パドプロスにより指摘されている。さらに

パドプロスが各区域を一つの独立した「墓地」と見なし
ていることから明らかなように、それぞれがある程度の
規模を有していた。もしも「墓地」という表現が適切であ
るならば、アゴラはそれら複数の墓地の集合体であったと
いうことになる。¹²⁾

問題は各埋葬領域がどのような要因で区分されていたの
かということである。可能性の一つとして想起されること
は、親族など血縁関係、または疑似血縁関係に基づく集団
など集落内部の何らかのグループにより、埋葬場所が指定
されていたということであろう。一方別の仮説としては、
複数の集落が個別に埋葬地を所有していた可能性も否定で
きまい。ただしこの説に関しては、アテネ中心部における
初期鉄器時代の集落分布は未だ詳細が不明であるという弱
点がある。少なくとも現時点においてこの問題について断
定的な結論を下すことは不可能であり、したがっていずれ
の可能性も想像の域を出るものではない。ただし墓数の多
さを考慮に入れるのであるならば、集落分布が不明という
弱点は存在するが、複数の集落の合同埋葬地であった可能
性が強いのではないかという印象を受ける。

ところで先に記したようにアゴラはミケーネ時代におい
ても墓域が営まれていた場所であり、それがそのまま初期
鉄器時代にも埋葬地として使用された。ミケーネ文化の中

心地でありギリシア世界でおそらく最も多数の岩室墓が発
掘されているアルゴリスにおいてこのような事例が存在し
ないことを考えると、¹³⁾かかるアゴラの特徴はミケーネ時代
と初期鉄器時代との関連性を考える上で重要な要素と見な
しうる。アルゴリスの諸集落に比べれば、アゴラの場合は
ミケーネ時代から初期鉄器時代にかけての社会変動が比較
的ゆるやかであったと推察しえよう。¹⁴⁾

それでは初期鉄器時代の埋葬習慣について、具体的に見
ていこう。時期ごとに明確な特徴がある。

まず亜ミケーネ期においては、唯一の例外を除いて、す
べて土葬である。墓の形態は、成人の場合には墓壇の周壁
に板石をめぐらす石棺墓(図2)、および堅穴を掘っただ
けの土壇墓、また子供の場合には、石棺墓も見受けられ
るが、土壇墓が主流であった。埋葬姿勢はどの年齢層も伸展
葬が一般的である。¹⁵⁾したがって亜ミケーネ期に関しては、
大人と子供の埋葬習慣において後の時代ほど大きな相違は
見受けられない。

続く原幾何学文様期に入ると、火葬の導入という劇的な
変化が生じる。幾つかの例外を除いて、¹⁶⁾原幾何学文様期の
成人の埋葬方法は原則的に火葬となる。墓のタイプは茶毘
に付した遺骨を火葬骨壺であるアンフォラに納め、それを
墓壇に埋めるのが一般的である。一方で子供は土葬のまま

ギリシアにおける初期鉄器時代の遺跡(1) アテネのアゴラ
であった。子供の墓としては土壇墓、周壁に礫石をめぐら
せる周石墓、さらには土器を棺として使用する土器棺墓な
どが用いられ、成人とは明確に異なる方法で葬られた。

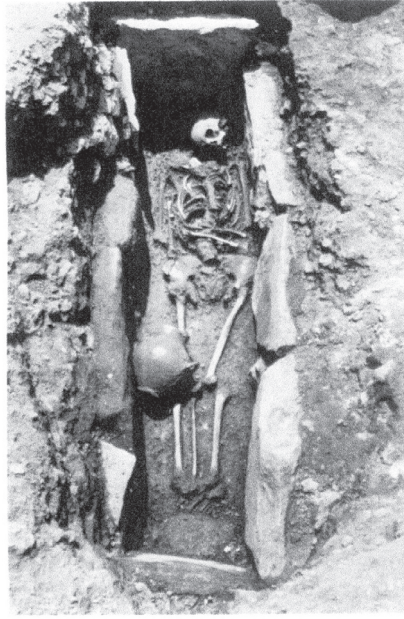


図2 亜ミケーネ期の石棺墓(15:3号墓)

このように原幾何学文様期に関しては、亜ミケーネ期に
は認められない埋葬習慣における年齢による大きな差異が
存在する。想像をたくましくするならば、それはこれらの
墓を造営した人々の(諸)集落が、ミケーネ文化崩壊以後
の混乱から徐々に復興を遂げると同時に新しい秩序を形成

(高橋)

し、社会構成員として認められた者と未だそうではない者
との間に明確な相違を設けるようになったことを示唆して
いるのかもしれない。

その後原幾何学文様期と同様の習慣が初期幾何学文様期
においても継続され、さらにはアゴラというよりはアレイ
オス・パゴスの資料であるが、中期幾何学文様期に関して
もかかる傾向がうかがわれる。ところが後期幾何学文様期
に入ると、理由は不明であるが、再び成人に対しても土葬
が行われるようになる。管見の限り現今の公表資料に基づ
くならば後期幾何学文様期の火葬は発見されておらず、土
葬への移行は徹底されていたと言えるであろう。墓のタイ
プは成人の場合には土壇墓しか知られておらず、一方で子供
の場合には土壇墓のほかに、とりわけ乳幼児に対してはア
ンフォラなどを棺とする土器棺墓や大型ピソスを棺とする
ピソス墓が選択されている。また年齢を問わず土壇墓の場
合の埋葬姿勢は伸展葬であった。

原幾何学文様期以来成人に対しては火葬が優勢であった
のに反して後期幾何学文様期には土葬が主流になるという
現象は、アゴラ以外のアテネ中心部の遺跡においてもうか
がわれるものである。これが単なる習慣または嗜好の変化
によるものなのか、または何らかの規則や規制に基づくも
のであるのかその理由は不明である。ただし例外が散見さ

れる他の墓域と比べると、アゴラの場合はより強い強制力が働いていたという印象は否めない。もしかしたらそれはこの墓域を造った人々の（諸）集落においては、組織化ないしは統制化が進展していた可能性を暗示しているのかもしれない。

以下、二つほど著名な埋葬例を紹介したい。最初に火葬墓である。火葬の場合には茶毘に付された遺骨を骨壺に納めるタイプと直接墓壇に安置するタイプがあるが、骨壺を伴う方が多い。ここではとりわけ著名な例として、通称「戦士の墓」と言われる初期幾何学文様期のD 16・4号墓を取

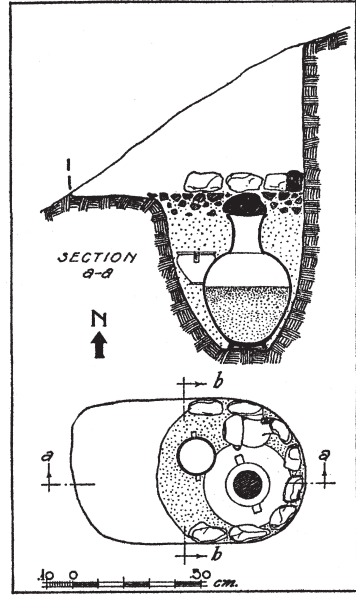


図3・1 「戦士の墓」の断面図(東-西)と平面図

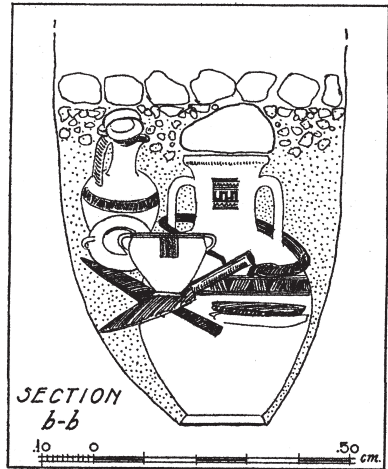


図3・2 「戦士の墓」の断面図(北-南)

り上げたい。

D 16・4号墓は平面図で見ると、最初に東西方向を主軸方位とする○・九〇×○・六〇m前後の長方形の墓壇が掘られたあと、その東側半分に骨壺であるアンフォラを安置するためのより深い縦穴が設けられているように見える(図3・1、下の図)。したがっていわゆる「墓壇と縦穴 (trench-and-hole)」のタイプのように思えるが、必ずしもそうではない。というのも断面図(図3・1、上の図)から明らかのように、この墓は斜面に位置しているために最初に平地を造る必要があった。平面図に示されている西

ギリシアにおける初期鉄器時代の遺跡（1）アテネのアゴラ（高橋）

側半分の掘り込みの線は、墓壙というよりはむしろ平地を造った痕跡と解釈すべきであろう。事実斜面の上方からは六〇cmほど掘り込まれているが、下方にあたる西側部分はほとんど掘り下げられてはいない。

このような構造から、D 16・4号墓の副葬品はすべて骨壺を安置するための竪穴の中、すなわちアンフォラの中および周囲に納められていた（図3・2）。骨壺（アンフォラ）は石で蓋をされており、中からは別の場所で茶毘に付された部分的に焼けた状態の遺骨が発見されている。人類学的な鑑定によれば、被葬者は三四歳前後の男性であったという。

このD 16・4号墓が概説書などで頻繁に取り上げられる理由は、アンフォラの胴部上部から頸部下端にかけて、副葬品の一つである鉄剣が巻きつけられていたことによる。いわゆる「殺された」剣と表現される現象である。この剣は長さが八三・三cmという大型の鉄製であり、おそらく軽微な力で容易に湾曲しうる武器ではないであろう。それを敢えてこのような状態で副葬したのはいかなる理由によるものなのか、研究者の関心を集めてきた。と同時に他の副葬品も豊富なことから、この墓は初期鉄器時代研究において最も著名な資料の一つと目しうる存在となった。

アゴラからはこの墓以外からも鉄製剣が出土しているが（表2）、このように湾曲された状態で発見された例はほか

には存在しない。同様に火葬墓であってもN 16・4号墓の場合には鉄製剣が墓壙の中（そして火葬骨壺の外側）に、

曲げられたり折られたりすることなく埋められていた。A R II号墓の鉄製剣も、おそらくそのままの状態で見つけられていた。またR 20・1号墓の鉄製剣は墓壙内部の火葬骨壺に立てかけられるような状態で安置されており、さらには木製さやの痕跡も検出されている。ということは、この場合もほぼ間違いなく意図的な変形や損傷を受けることなく埋められていたと推察されよう。これらの資料と比べると、D 16・4号墓の特殊性が際立っていることは明らかである。

ただしアゴラ以外からは、アテネ中心部の他の遺跡やサラミスから「殺された」剣と同様の事例が報告されている。また土器に巻きつけられてはいないが、エウボイア島レフカンディからは二つに折り曲げられた鉄剣が発見されており、おそらく類似例と見なしてさしつかえないであろう。ということは「殺された」剣は必ずしもD 16・4号墓に特有の現象ではない。それではなぜこのように剣を湾曲させ、そして巻きつけたのであろうか。

この問題に関しては決定的な証拠が存在せず、多様な解釈が提示される。第一に、被葬者の地位や功績により特別な処遇を受けたという推察が可能であろう。なぜならD 16・4号墓の副葬品は土器のほかは鉄製の武器が多いため

(表1と2)、被葬者は一般に戦士と見なされている。³³⁾さらには鉄製のみも出土していることから、より踏み込んで騎士であったと推測する研究者も存在する。³⁴⁾とするならば、生前の社会的地位や功績、ないしは死因(とりわけ戦死)など何らかの理由により、特別の習慣や葬送儀礼に基づく配慮が施された可能性が示唆されよう。³⁵⁾

一方で別の解釈として、D16・4号墓は大型の副葬品を納めることが困難であることを考えるならば、墓の構造上やむを得ずこのような形で埋めたとも推察される。「殺された」剣が出土している墓は火葬のものばかりであり、大型の副葬品をそのまま安置しうる土葬墓からは出土例がないことが、この第二の仮説を支持しているようにも見える。しかし火葬の場合でも大きな剣を埋めるだけの墓壙をあらかじめ準備することは可能であったこと、事実先に記したN16・4号墓のように火葬墓であっても湾曲したり折ったりせずにそのままの状態で鉄製剣を副葬している墓が存在することを考えると、この解釈には慎重な姿勢も要求されるよう。

D16・4号墓に関する報告論文が発表されて以来既に半世紀以上の年月が経過しているが、「殺された」剣に関しては現在でも決定的かつ統一された見解は存在しない。現時点においては、今後の資料の増加に期待をかけるしかない。

いという状況であろう。

いずれにせよ、D16・4号墓の被葬者は遺族から手厚く葬られたことが想像される。なぜなら墓穴の覆土からは炭の塊や炭化したいちじくやぶどうが発見されており、墓が土で覆われる前に葬送儀礼が催されたことがうかがえるからである。³⁶⁾故人との最期の別れを嘆き悲しむ近親者の姿が、出土資料から垣間見られるようである。さらに墓穴が埋められたあと、おそらく墓の位置を示していたと思われる配石が半楕円状に施されたが(図3・1)、それは墓参のためであったとも推察されよう。D16・4号墓の被葬者は、家族や友人たちからその死を悼まれ惜しまれながらもあの世へと旅立っていった。

一方で、おそらく同時期の埋葬でありながら全く異なる特徴を有しているのが、のちにエレウシニオンが建立された区域で発掘されたU・V19・1a号墓である。この墓は井戸(U・V19・1)の覆土から発見された特殊な埋葬であり、年代はおそらく副葬品であったと思われる土器から初期幾何学文様期と推測されている。被葬者は成人男性であり、埋葬方法は土葬、遺体の姿勢は屈葬であった。アゴラでは初期幾何学文様期における成人の埋葬は、たとえば先に言及したD16・4号墓のように、火葬が主流であるために、このU・V19・1a号墓の被葬者は例外的な方法で葬ら

ギリシアにおける初期鉄器時代の遺跡(1) アテネのアゴラ(高橋)

れたと見なしうる。そのみならず廃棄され埋められつつある井戸の内部に板石が敷かれ、遺体が安置されており、いわゆる墓という構造物が造られた形跡が存在しない。極めて異例な埋葬である。

U・V 19・1a号墓の人骨に関する人類学的な調査結果によれば、被葬者は存命中に頭蓋骨に損傷を受けており、たとえば失語症やてんかんなど、何らかの後遺症が残った可能性がありうるという。さらには墓というものが造られることなく埋められていたという特殊性などから判断した結果、この被葬者はおそらく社会的に排除された人物であったのではないかと推測が提示されている。確かに当該期の習慣から極端に逸脱した埋葬方法からは、特別な事情が介在したという印象は免れない。アゴラに埋葬された多くの被葬者が親族や友人の手により手厚く葬られ黄泉の国へと旅立って行ったことは想像に難くないが、その一方で必ずしもそれには該当しない事例も存在したということであろう。

最後に墓そのものが出土したわけではないので表1には含めなかったが、ヘファイストス神殿一帯から出土したアンフォラについて言及しておきたい。おそらく古代のうちに破壊された墓に納められていたと推測されており、後期幾何学文様期のキクラデス(おそらくシロス)製の蓋然性

が高いと報告されている。単に土器が運ばれてきただけではなくそこからの移住者が存在した可能性が推測されており、もしもそうであるならば初期鉄器時代におけるキクラデス諸島とアテネ中心部との関係を探る上で重要な資料である。⁽³⁹⁾

② 副葬品

アゴラ出土の墓からは多数の副葬品が発見されており、初期鉄器時代研究における重要資料としてさまざまに検討されてきた。通時的に最も一般的かつ主要な副葬品は土器であり、土器しか副葬されていない例も多い。それらの土器がアッティカにおける相對編年の確立に多大な貢献を果たしてきたことは、あらためて記すまでもない周知の事実であろう。

被葬者が子供の場合には明らかな特徴があり、小型(ないしはミニチュア)土器が多く副葬されている。たとえば後期幾何学文様期のN11・1号墓は一〇歳の子供の墓と報告されているが、副葬品の土器四個すべてが実用には適さないほど小さいサイズである。⁽⁴⁰⁾ また一歳に満たない乳児が埋葬されていたD16・3号墓からも小型の土器が幾つも出土しており、そのうちの一つであるスキュフォスは、把手が二つある平底の鉢のような形状であるが、高さはわずか

に四・一cm、直径は六・七cmである。^④あまりにも非実用的なミニチュア土器は、被葬者が生前に使用していた玩具をそのまま副葬した可能性も想定しえよう。ただし、それらの土器を被葬者が実際に使用していたか否かは別として、やはり乳幼児および子供に対しては成人の被葬者とは異なる処遇や配慮が施されたことは明らかである。

また必ずしも数は多くないが、副葬品の中にはるくろを使用しないで製造された手づくね土器も含まれている。そして特筆すべきことに、被葬者が確認されうる場合に限りて言えば、それらが出土している墓はすべて子供または女性のものであり、おそらくは被葬者の社会的立場と関連があるように推察される。

手づくね土器は大きく二つに分類される。一つは、おそらく料理用または水差しなど、日常生活において使用される粗製土器の類である。このような土器が原幾何学文様期のT15・1号墓のように成人女性の墓から発見されることは家の中での役割を考えれば至極当然と言えるが、現今の公表資料に基づくならば、後期幾何学文様期の子供（とりわけ乳幼児）の墓から出土例が多いことは注目されよう。^⑤もう一方の種類は、粗製ではない手づくね土器である。その代表が一般に香油を入れたと推測されているアリュボロスであり、その他の例としては刻文様が施された鉢（ポー

ル）などが出土している。^⑥

土器に続いては金属製品が多い。ただし土器が出土した墓の数と金属製品が出土したそれとを比較するならば後者の方がはるかに少なく、おそらく価値が高かったと推察される。材質による分類ではそのほとんどが鉄製品または青銅製品であり、また品物の種類としては剣ややり先などの武器やナイフ類（表2）とファイブラやピンなどの装飾品（表3）の二つに大別される。

青銅器時代から鉄器時代へと大きく社会が変化する中で、アゴラ出土のこれらの遺物からはどのような特徴を読み取ることができるであろうか。^⑦まず鉄器時代の開始時期であるが、亜ミケーネ期に関してはほとんど鉄製品は発見されておらず、本格的な鉄器時代は原幾何学文様期に始まった。また原幾何学文様期以降の青銅製品と鉄製品の傾向においては、武器やナイフなどの刃物類（表2）とファイブラやピンなどの装飾品（表3）との間に大きな相違が看取されうる。武器やナイフなどの刃物類は初期鉄器時代を通じて事実上すべてが鉄製品であるが、一方装飾品に関しては鉄製品と同様に青銅製品も好まれた。したがって鉄器時代が到来しても、用途によっては鉄ばかりが尊重されたわけではないと結論されよう。^⑧

一方金製品は、わずかに初期幾何学文様期のいわゆる「富

裕なアテネ婦人の墓(H 16・6号墓)から出土しているのみである。H 16・6号墓に副葬されていた金製品は指輪六個と耳飾り一組であるが、とりわけ耳飾りは台形の裝飾板の先端にざくろの形をした飾りが三個付けられた豪華かつ繊細な品であり、高価であったことは想像に難くない⁽⁴⁸⁾。それを考えるならばアゴラの墓における金製品の少なさは、嗜好または価値観によるという可能性のみならず、おそらくは高価かつ入手が困難であったからと推察されよう。

上記以外の金属としては、初期幾何学文様期の「ブーツ墓」(D 16・2号墓)から出土した一組のらせん状裝飾品に関して、おそらくこはく金であろうという報告がある⁽⁴⁹⁾。また現今の公表資料においては、銀製品は確認しえない。

さらに土器や金属製品のほかには、骨製品、ガラス製品、たとえば原幾何学文様期のC 9・10号墓の紡錘車のような石製品、また粘土で何らかの形を模した土製品、さらには貝殻などが報告されている。

ところで前項にて紹介した「殺された」剣をはじめ、アゴラ出土の副葬品には概説書で紹介される著名な例が多い。その代表として、初期幾何学文様期のいわゆる「ブーツ墓」(D 16・2号墓)から出土した、そしてその通称の由来となった靴の形をした土製品⁽⁵⁰⁾(図4)が言及されよう。ひもで縛るタイプの革製のブーツを模したものであり、こ



図4 「ブーツ墓」出土の靴の形をした土製品

の墓からは大小の二組が発見されている。類例はアッティカの墓を中心に他地域からも報告があり、かつては黄泉の国への旅路と関連がある遺物と見なされてきた。しかしイストミアの聖域に関する報告書を公刊したC・モーガンが、埋葬とは無関係のその聖域からも出土例があることから従来説に疑問を投げかけた。そしてこれらの遺物は被葬者が若い女性の墓から出土する傾向が強いため、むしろ嫁ぎ先の家へと向かう旅のための靴であり、結婚による人生の上での変化を象徴するものではないかという仮説を提示した。より最近の研究においては、S・ラングドンがやはり婚礼や結婚との関連を推測している⁽²⁰⁾。

また後期幾何学文様期の土葬墓（G 12・12号墓）から出土した特殊な土器も、アゴラの副葬品の中でとりわけ著名なものの一つである（図5・1）。器形そのものは一般的なオイノコエーであるが、何らかの理由により胴部に管が通されている。それがどのような用途のために作られたのかという点に関しては、今もって決定的な解釈が存在しない。さらにそれ以上に議論の対象とされてきたのが、胴部の図柄である。背中あわせに体が接合されているかのような二人の人物が描かれており、従来シヤム双生児ではないかとも見なされてきた。そのためシヤム双生児と言われるホメロス（『イリアス』一一巻七〇九・七一〇、七五〇・

七五二）に登場するモリオオネの子供たちとの関連性が推測され、初期鉄器時代の図像表現とホメロスの叙事詩との関係を論じるに際しては必須の資料とされてきた⁽²¹⁾。

しかし二〇〇七年に、新たな可能性が提示された。この「シヤム双生児」の図が把手の真下、つまり注ぎ口を正面としてこの土器を置いた場合に最も裏側にあたる場所に描かれていることから、本来絵師が考えた図案においては二人の人物は起点と終点とに別個に配置されていたのではないかという説である（図5・2）。この仮説にしたがうならば、二人の人物は当然のことながらシヤム双生児ではないということになる。絵師の意図がもしも実際にそうであった場合には、長きにわたる従来の議論を一掃する鮮やかな視点の転換と言えるであろう。残念ながらこの問題に関しては断定的な結論を導き出すことは不可能であるようにも感じるが、新説は他の土器のものをも含めたシヤム双生児の図柄をめぐる議論のみならず、初期鉄器時代における図像の分析全般に一石を投じた業績と評価される。

さらにとりわけ注目を集めてきた例として、先にも言及した初期幾何学文様期のいわゆる「富裕なアテネ婦人の墓」（H 16・6号墓）がある。穀倉を模した土製品（図6）をはじめ、質量ともに傑出した遺物が出土した火葬墓である⁽²²⁾。その通称から明らかなように、副葬品の豪華さは従来

故人ないしはその家族の財産や社会的地位を象徴している
と見なされてきた。しかし発掘されてから数十年が経過
したあとに遺骨に関する人類学的な分析が施された結果、
それ以前には知られていなかった新たな事実が判明した。
二〇〇四年に発表された論文によれば、この墓から出土し
た人骨には成人女性の骨のほかに胎児の骨が含まれている
という。したがってこの女性は妊娠中または出産時に死亡
した可能性が高いと結論され、その論文においてはかかる
死亡原因が豊富かつ貴重な品々を副葬する理由であったと



図5・1 管の通ったオイノコエーとその胴部の図



図5・2 2007年に発表された胴部の図

いう解釈が提示された⁸⁸。確かにそのような死因が副葬品に影響を与えた可能性は十分に考えられようが、ただしそれが財産や地位は関連がないという論拠に直結するわけではない。おそらく社会的に上層部に属する女性が妊娠中または出産時に死亡したことにより、これだけ異例な副葬品が納められたと見なす方が妥当であろう。

というのもこの墓のみならず前項にて「殺された」剣を紹介した「戦士の墓」(D16・4号墓)さらには「ブーツ墓」(D16・2号墓)など、傑出して副葬品が豪華な墓は初期幾何学文様期に顕著にうかがわれるからである。未発表資料が多いために不安は伴うが表1にまとめたデータに基づくならば、亜ミケーネ期に関しては、例外的に多数の金属製品が発見されたI5・2号墓以外は、いずれの墓も出土土器の数は〇〜二個、また金属製品に関しては目下のところC9・3号墓の青銅製の指輪以外は確認しえない。続く原幾何学文様期に入るとやや副葬品の数が多い例が散見されるようになり、そして初期幾何学文様期に入ると劇的に豪華な墓が出現する。その代表が「富裕なアテネ婦人の墓」であり、土器が三〇個以上も出土している上に金製品を含む多数の金属製品、さらには象牙製品も発見された。また「戦士の墓」は前項にて紹介したように金属製品が際立っており、一方で「ブーツ墓」からは先に言及したブーツ形土製

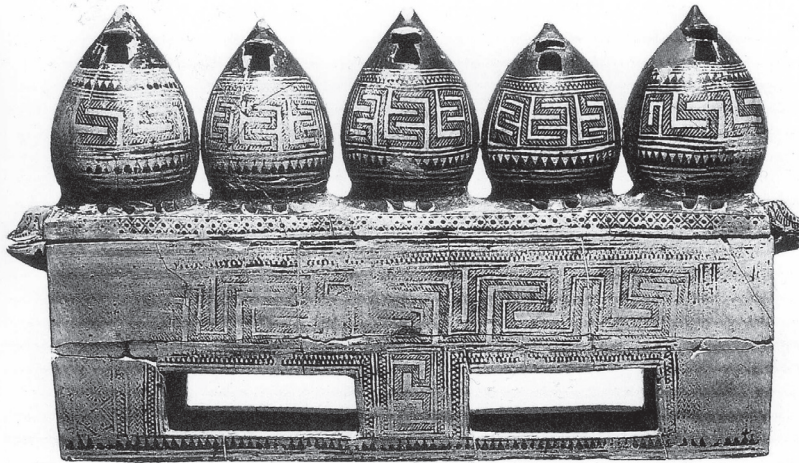


図6 「富裕なアテネ婦人の墓」出土の穀倉を模した土製品

ギリシアにおける初期鉄器時代の遺跡(1) アテネのアゴラ(高橋)

品(図4)のほかに二〇を超える多量の土器が発掘されている。ここまで例外的な事例は編年区分における一つ前の時代、すなわち原幾何学文様期においては看取しえない特徴的な現象である。

このように初期幾何学文様期に特段に豪華な副葬品を伴う墓が出現した事実は、おそらくこの時期にそれにふさわしい社会層が成立したことを示唆していると推察されよう。とするならば「富裕なアテネ婦人の墓」の副葬品も、やはり被葬者やその親族のステータスを反映している可能性が高い。ともあれ死亡要因が副葬品に大きな影響を与えたという見解は、ややもすれば副葬品の多寡を貧富の差や社会層ばかりと結び付けて解釈する傾向が強い初期鉄器時代の埋葬資料研究において、看過しえない重要な視座を提示したと評価しえよう。

最後に、現今の公表資料に基づくならば、アゴラの副葬品においては他地域からの搬入品が少ないことが指摘される^④。確かに、後期幾何学文様期のE19・3号墓から出土したスカラベのように他地域製と思われる遺物も存在する^⑤。しかし管見の限り、たとえばフェニキア製の青銅製品のように顕著な遺物は報告がない。次項(③井戸)にて記すようにアゴラでは土器が製造されていたために、土器に関しては技術的に優れたアゴラ製が好まれた可能性は指摘され

るが、ただしそれだけではここまで搬入品が少ないことに對して十分な説明がなされたとは言えない。

かかるアゴラの現象は、アッティカ製の土器が広く他地域に搬出されたことを考慮するならば、とりわけ注目にあたいする。ギリシア内外各地からアッティカ製の土器が出土しているが、その中にアゴラで製造されたものが含まれているならば、アゴラからはその対価として受け取ったものが出土することが期待されよう。ところが目下のところ、それが確認できない。その理由の解明に関しては地中海全域を視野に入れた該期の交易システムや他地域との交流の実態を具体的に明らかにする研究、さらに願わくは他地域から出土したアッティカ製の土器がアッティカのどの場所で作られたものかを科学および考古学の双方の立場から同定する研究が進展することが望まれる。そして何よりもまずアゴラの詳細なデータが必要不可欠であることは明白であり、今後の報告が注目されよう。

③ 井戸

アゴラからは初期鉄器時代および前古典期の井戸が数多く発見されており、初期鉄器時代と年代づけられるものだけでもその数は三〇を優に上回る^⑥(図1)。その覆土からは土器をはじめとして大量の遺物が発掘されており、大き

な注目を集めてきた。⁽⁶⁴⁾

これらの井戸をめぐるのはアゴラの調査に携わる研究者の間で解釈が分かれており、それが初期鉄器時代におけるこの遺跡の性格を規定するに際して大きな影響を与えている。

まず伝統的な意見は個人の家屋に付設された井戸という見解であり、長年アゴラの調査に携わりそして指揮してきたJ・M・キャンブが提唱している。アゴラからは、次項にて記すように、初期鉄器時代の住居址であることが確実な建築遺構は出土していない。したがって家屋部分は後代に破壊されてしまい、地下に掘られた井戸のみが残ったという仮定に立った上での推測である。この意見を採用するならば、初期鉄器時代のアゴラは墓域のみならず居住地でもあったということになる。⁽⁶⁵⁾

そしてこの解釈がアゴラの調査報告シリーズのみならず、初期鉄器時代に関する主要な研究者により長年にわたって支持されてきた見解である。V・R・d・A・デズボロ、⁽⁶⁶⁾ A・M・スノッドグラス、⁽⁶⁷⁾ J・N・コールドストリーム、⁽⁶⁸⁾ I・モリス、⁽⁶⁹⁾ J・ウィットリといった錚々たる面々が肯定してきたことにより、アゴラは墓地であったと同時に集落でもあったという意見が通説のように見なされ、⁽⁷⁰⁾ 井戸の性格に関しても疑問が呈されることはなかった。I・レ

モスのように慎重な姿勢を示す研究者も見受けられたが、それはむしろ少数派であったと言えるであろう。⁽⁷¹⁾

このような趨勢に真っ向から挑んだのが、アゴラの初期鉄器時代関連の資料を担当している、そして冒頭にも記したとおり、土器製作に関する報告書を出版したJ・K・パドプロスである。アゴラからは井戸を中心に、おそらく土器の試作のために使用されたと思われる破片や廃棄された不良品など土器の製造に関連する遺物が多数出土しているが、従来あまり注目されることはなかった。パドプロスの業績により初めてそれらが重要資料として収集および報告され、その結果、初期鉄器時代のアゴラにおいては土器生産が盛んに行われていたことは否定しえない事実と見なされるようになった。そしてパドプロスが考えているように、土器生産に関する遺物が出土している井戸はほぼ間違いなく土器の工房に属するものと見なしえよう。ということはずなわち、アゴラの井戸は個人の家屋に付設されたものであるという長年にわたって支持されてきた通説が、批判にさらされることになった。⁽⁷²⁾

古典期のアゴラが設立されるにともない土器の工房は現在ケラメイコスと呼ばれている遺跡のある場所へと移転されるが、それ以前においてはアゴラの遺跡こそが「元来のケラメイコス (original Kerameikos)」であったとパドプロ

ギリシアにおける初期鉄器時代の遺跡（1）アテネのアゴラ（高橋）

ロスと言う。そしてこの場所において土器が製造された理由は、おそらくエリダノス川の水を利用することが可能であったからであろうと推測している。⁶⁵確かにその通りであるろうが、ただしエリダノス川の流域でもとりわけこの場所に工房が集中している事実は、何らかの強制力が働いていた可能性を示唆しているように思われる。初期鉄器時代におけるアゴラの土器生産が全く私的に行われていたのか、または集落の管理のもとになされていたのかは不明であるが、少なくとも工房を建設するに際しては場所の選択が無秩序に行われたわけではないと推察されよう。

事実パドプロスによれば、アゴラにおいては墓地と土器工房のための土地とが区分けされていたという。土器生産に関連がある遺物は後代に中央のストアやオデオンが建立された周辺の井戸などからとりわけ多く出土しており、そしてそれは初期鉄器時代の墓が比較的少ない場所に該当する。逆に墓が密集しているのはそれをとり囲む一帯であり、ということは土器の製造と埋葬という異なる目的のためある程度土地の利用が区分けされていたということになる。⁶⁶おそらくそれは偶然によるものではなく、意図的にコントロールされた結果であろう。

ところでアゴラは土器工房と墓地のための土地であり集落ではなかったと考えるパドプロスは、個人の家屋は、

資料状況は不十分ではあるが、アクロポリスの上およびその周囲に建造されていたと推測している。⁶⁷確かにもしもアゴラに個人の住居が存在しなかった場合には、アクロポリスおよびその周辺が居住地としての最有力候補であろう。

ただしアクロポリスからも初期鉄器時代の墓が発見されていること、⁶⁸また大半の資料が未発表でありアクロポリスにおける居住規模が不明であることを考えあわせると、慎重な姿勢が要求される。さらにアゴラの墓を造った人々がアクロポリス一帯の居住者のみであったならば、アクロポリスに近い場所により密集した分布になるのではないかという疑問も残る（図1参照）。アテネ中心部における初期鉄器時代の集落分布は詳細が不明であるが、アクロポリス一帯以外にも居住地が存在した可能性は排除できないのではないか。

話を井戸に戻すと、パドプロスの意見に従うのであるならば、アゴラの井戸は個人の家屋に付設されたものではありえないということになる。ただしここで問題となるのは、三〇基以上発見されている初期鉄器時代の井戸すべてから、⁶⁹土器の生産を示唆する遺物が出土したわけではないということである。パドプロスの著作において土器製造関連の資料が報告されている井戸（もしくは井戸か土壙）はわずかに九基、⁷⁰可能性があるもう一基（K12・2）を含む

めても一〇基である^⑧。にもかかわらず、パドプロスはアゴラの井戸の多くが土器の工房に関連があると見なしている。その理由として、第一に土器製造関連の資料が出土していないすべての井戸は出土している井戸の近辺にあること、第二に従来家庭用と解釈されていた遺物が実際には土器生産に関連するものであった事例が存在することを列挙している^⑨。

確かにパドプロスが報告した遺構以外にも、土器製造に関連した井戸が多数存在していた可能性は非常に高い。しかしだからといって、アゴラの初期鉄器時代の井戸すべてが全くもって土器生産のためだけに使用されていたかという、それは必ずしも明らかではないであろう。事実、パドプロスもすべての井戸が土器製造に関連していたとは記しておらず、「多くの」と表現している^⑩。

それではやはり個人の家屋に付設された井戸も存在したのかというと、その可能性は低いように感じられる。その根拠としてはまず何よりも、初期鉄器時代のアゴラが居住されていたことを示す確実な資料が皆無であることが言及されよう。次に、必ずしも居住に適した環境ではなかったと推察されることがその理由である。とりわけアゴラ北西部は、エリダノス川の地下水路が未だ建設されてはいない初期鉄器時代においては、定期的に湿地となる場所であ

り、居住は不可能であった^⑪。一方で工房や窯が立ち並んでいた一画は、かなりの量の煙が漂う場所であったと推察されることから、やはり居住には不向きであったのではないか。アゴラにおける土器生産は相当程度の規模を有していたと思われ、排出される煙の量を想像するならば、居住するには良好な環境とは言い難い。先に記したように(①墓)、原幾何学文様期から中期幾何学文様期にかけては火葬が普及していたため、より広範囲にわたってかかる傾向が強かったであろう。

とするならば、アゴラの井戸は土器生産以外にどのような用途で使用されていた可能性があるであろうか。目下のところ筆者が想定しているのは、近隣住民が共同で使用する公共施設のような井戸の存在である。

このように考える理由は、アクロポリス周辺の遺構にある。アクロポリスの北西麓に位置するクレプシュドラの泉は古典期の遺構として著名であるが、その周辺一帯からは幾つもの井戸が発見されている。その歴史は古く新石器時代にまで遡ることが確認されており、その時代の遺物が発見されている井戸の数は二〇基を数える^⑫。中期青銅器時代に関しては五基、ミケーネ時代には二基が確認されており、そして前古典期においてもこの区域の井戸が幾つも使用されていた(図1)。ということはこの一帯が通時的にアク

ロポリス周辺の居住者にとって、水を得るのに重要かつ適した場所であったことを示唆していよう。にもかかわらず、初期鉄器時代の資料はわずかにしか出土していない^⑧。さらにミケーネ時代にアクロポリスの北斜面に造られた水汲み場（泉）に関しても、初期鉄器時代の土器片は出土している量が少なく、大規模に使用された形跡はうかがえない。ということは、初期鉄器時代においてはアクロポリス一帯の住民は主に別の場所から水を得ていたということになる。そしてこの問題に対する最も自然な解釈は、アゴラの井戸を使用していたということではないか。

パドプロスの業績は、初期鉄器時代のアゴラにおいては土器の製造が盛んに行われていたことを明らかにした。ただしそれは、当該期の井戸がそのために排他的に使用されていたことを示唆するものではない。おそらく初期鉄器時代のアゴラの井戸は、日常生活用の水を得るために近隣の住民たちも利用していたと推測しうるのではないか。

④ 建築遺構

古典期以降におけるこの地の過密な使用を考えるならば、もしも初期鉄器時代に何らかの建物が建造されたとしても、既に古代のうちに破壊されたであろうことは想像に

難くない。事実、初期鉄器時代の地上の構築物はわずかに一つしか発見されていない。一九三二年にアレイオス・パゴスの北斜面の麓で発掘された建造物であり、その用途をめぐって議論が展開されてきた著名な資料である。

後世の建物や貯水槽などにより大部分が破壊されているが、この遺構の平面プランはほぼ間違いないと判明している（図7）。東西方向を主軸方位とし、形状はやや不整形な楕円、また規模は 11.0×5.0 mである。入り口がどこにあったのかは不明である。建設および放棄の年代に関しては、アゴラの調査報告によるならばおそらく前九世紀半ば以降に建てられ前八世紀の第三四半期前後に放棄された可能性が高いという。とするならば土器の編年体系で言えば中期幾何学文様期に該当するが、より時代を下げて後期幾何学文様期と見なす研究者も存在し、必ずしも諸家の間で見解の一致は見えないというのが実状であろう。詳細な年代に関しては決定的な判断材料が存在しないので、ここでは大まかに幾何学文様期と記しておきたい。

遺構の内部からは、この建物の性格を推し量るに際して重要な手がかりとなる資料が出土している。第一に、中央よりやや南東よりの場所から 1.0×0.6 m前後の範囲で焼土層が検出され、おそらく炉のあとではないかと推測されている。第二に、中央より西側部分の床下から、初

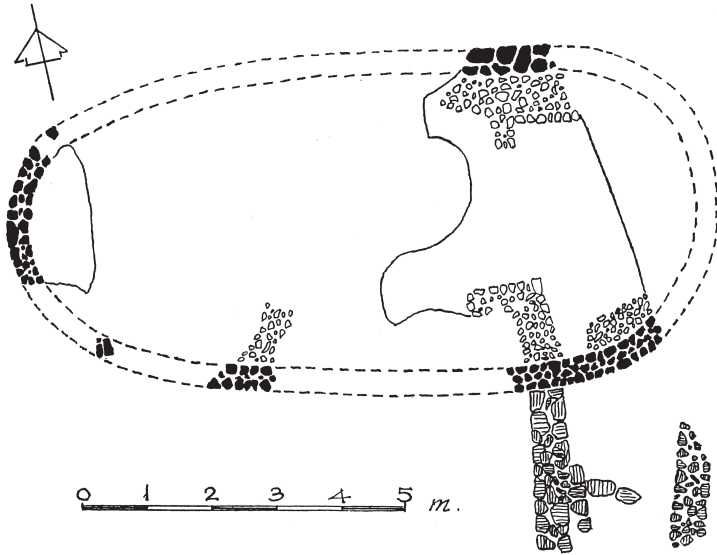


図7 初期鉄器時代の建築遺構

期幾何学文様期の子供の墓（H17・2号墓）が出土した。また破壊されてしまったが、ほかに墓が存在したようである。第三に、前七世紀の大量の奉納品が発掘された²⁶。

ややわかりにくいので発掘された資料を時系列順に並べると、最初に初期幾何学文様期の子供の墓（H17・2号墓）が造られた。そのあとに楕円形の建物が建てられ、何らかの目的のために一定期間使用されたあと、放棄された。そしてその後前七世紀になってから、奉納品が持ち込まれたということになる。問題は楕円形の建造物が、それ以前に造られた子供の墓（H17・2号墓）および放棄されたあとに持ち込まれた奉納品と、何らかの関係があるのか否かという点である。とりわけ建物自体の特徴からこの遺構の性格を推し量ることが困難であることを考えるならば、両者との関係はこの遺構の用途を推察するに際して看過しえない要素となろう。

先にも記したとおりこの遺構はアゴラの初期鉄器時代に関する唯一の建築遺構であり、その用途や特徴はアゴラ全体の遺跡の性格を考えるに際しても影響を与える重要な資料である。そして今までにこの建物の用途に関しては、二つの意見が提出されてきた。まず発掘された当初に提示された見解であるが、この建造物は住居址であると推測された。ということは当然のことながら、その建設の本来の目

ギリシアにおける初期鉄器時代の遺跡(1) アテネのアゴラ(高橋)

的はH17・2号墓の存在とは無関係と見なされていた⁸³⁾。しかしその後聖所ではないかという意見が提出され、むしろその墓があったからこそ建てられたと解釈されるようになった⁸⁴⁾。現在では後者の説が優勢であり、祖先や英雄(または半神)崇拜のための聖所、もしくは会食をはじめとした故人を偲ぶための葬送儀礼に関連がある施設と推測されている⁸⁵⁾。

少なくとも、放棄されたあとの前七世紀に奉納品が持ち込まれた時点においては、この建物が何らかの信仰や崇拜のための場と見なされていたことに異論はないであろう。ただしそれがさかのぼって初期鉄器時代におけるこの建物の使用目的と直接的な関連があったか否かは不明である。そのことをも含めて、本来の用途に関する明確な証拠は存在しない。したがって住居という当初の意見も、また聖所ないしは葬送儀礼のための施設というのちに与えられた見解も、双方ともに仮説の域を出てはいないというのが実際のところであろう。それでもあえて筆者の現段階における印象を記しておくならば、前項(③井戸)にて記したように初期鉄器時代のアゴラにおいては個人の家屋が存在した可能性は低いと見なされることも手伝って、やはり住居址と想定することには難を感じる。むしろ宗教関係の施設と見なす方が、おそらくは妥当であろう。

というのも住居という意見に関しては、直接的のみならず間接的な証拠も存在しないからである。当初この遺構が住居址であると推測された理由の一つに炉の存在があげられるが、それは宗教施設においても重要な要素であり、炉を根拠として住居か宗教施設かを判断することは不可能である。

一方で信仰または葬送儀礼のための建物という意見に関しては、この一帯の通時的な特徴を考えるならば、妥当性が高いように思われる。この遺構から二〇mほど北東の地点からは、三角形の平面プランを持つ前五世紀に建設された聖所が発掘されている(図8)。そして注目すべきはその下から前七世紀の建造物が出土していることであり、同様に宗教関係の施設と報告されている⁸⁶⁾。ということはこの周辺一帯は、既に前古典期には神聖な場所と見なされていたと結論されよう。それを踏まえて考えるならば、さらに時代をさかのぼって初期鉄器時代の後半期においても同様の可能性を想定することは、あながち的外れとは言い難いのではない⁸⁷⁾。

さらにはこの一帯からは初期鉄器時代の墓が何基も発見されており、その中には先に紹介した「富裕なアテネ婦人の墓」(H16・6号墓)も含まれている(図8)。このような別格の扱いを受けた墓がある周辺が特別視され、崇拜の

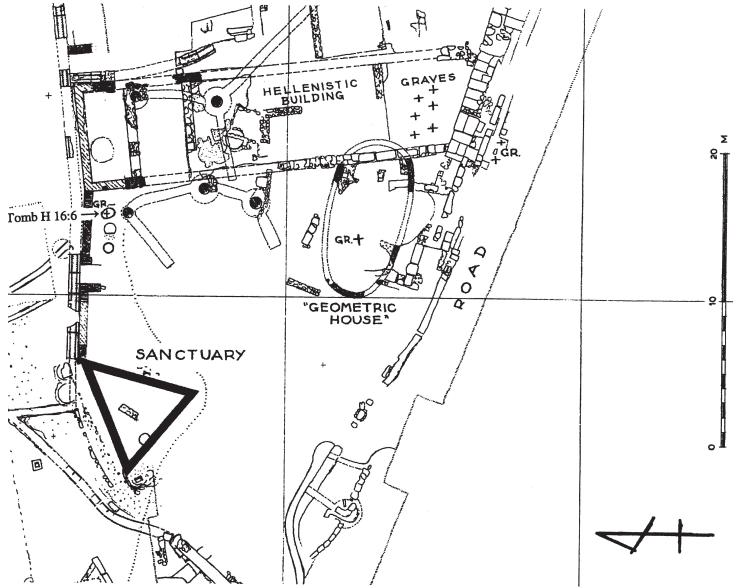


図8 初期鉄器時代の建築遺構周辺図

対象となった可能性は否定できまい。^⑤

これらの事柄を考慮するならば、楕円形の遺構はやはり宗教または葬送儀礼に関わる建造物であったと推測する方が妥当であろう。

初期鉄器時代の建築遺構を網羅的に収集および分析したマザラキス・アイニアンの著作においては、この遺構は葬礼または信仰に関係があるという意見が現在では優勢であると記されたあとに、「厳密には、しかし、一般的な住居であるという仮説も排除できない」という慎重な一言が添えられている。^⑥確かにその通りであるため、結論を下すことには躊躇を感じざるをえない。それでもこの一帯の通時的な特徴などから推し量る限りにおいては、より蓋然性が高いのは聖所もしくは葬送儀礼のための建物という見解であろう。

⑤ 墓所祭祀

ミケーネ時代の墓から初期鉄器時代以降の資料が出土するいわゆる墓所祭祀と呼ばれる現象は、一般に祖先崇拜や土着意識を高めるための行為と解釈されている。^⑦アゴラからはその可能性がある資料として下記のものがある。

(1) アレス神殿の下から発見されたミケーネ時代の岩室墓Ⅶ（J7・2）号の調査で、二基の原幾何学文様期の墓

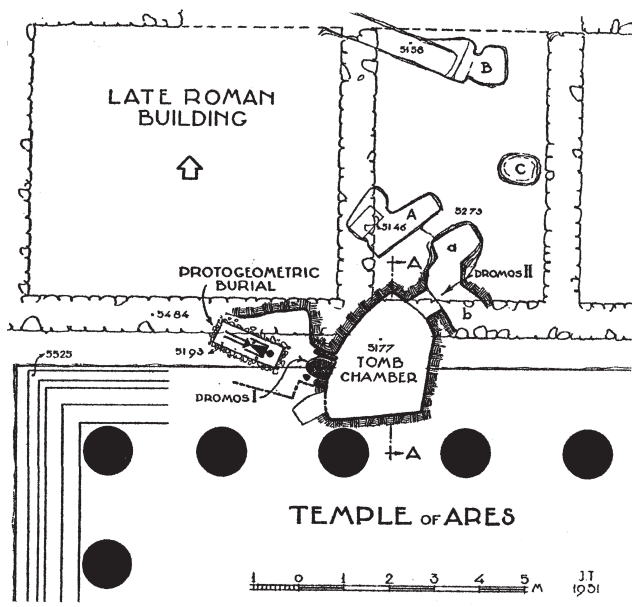


図9 ミケーネ時代の岩室墓 VII(J7:2) 号と原幾何学文様期の墓

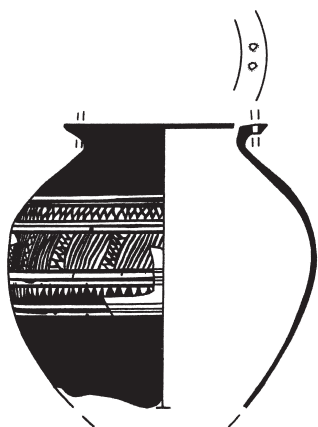


図10 ミケーネ時代の岩室墓 (J-K2:2号) 出土の原幾何学文様期の土器

が発見された。一基は岩室墓の墓室周辺に造られた火葬墓で、おそらくアレス神殿が建立されたときに破壊された。もう一基は子供の土葬墓で、西側の羨道に、また玄室の入り口付近に掘り込まれていた(図9)。

火葬墓の方はミケーネ時代の岩室墓の存在に気がついていたかさえ不明であり、墓所祭祀の一つと見なすことには確定的な根拠が存在しない。したがって問題は土葬墓の方であるが、こちらに関しても偶然に墓壙を掘った場所が岩室墓の羨道であったのか、あるいは意図してそこを選択したのか、断定的な結論を導きだすことは不可能である。ということは墓所祭祀の可能性がある資料と見なすにとどめておく方が、おそらくは安全であろう。

(2) ストア・ポイキレの北方で発見されたミケーネ時代の岩室墓 J・K 2・2 号から、原幾何学文様期の土器（ピュクス）が発見された。原幾何学文様期に特徴的な胴部が丸いピュクスで、小型の壺のような器形である（図 10）。通常蓋が付いているが、記載がないことから推察するに、おそらく発見されなかったであろう。ミケーネ時代の墓に偶然に混入されたのか、または原幾何学文様期にその墓が再利用された可能性が指摘されている。

このミケーネ時代の墓 J・K 2・2 号は、後代の建造物の上に建てられているために墓室の一部しか発掘されていない^⑩。ということとはピュクスも墓室から出土したことになるが、詳細な場所および出土状況は記載されていない。したがって現段階ではその土器が初期鉄器時代に意図的に岩室墓の墓室に置かれたものなのか、または偶然に混入したものなのか、判断する材料が皆無である。ミケーネ時代の墓 J・K 2・2 号とは全く関係なく造られた原幾何学文様期の墓が古典期など後代に破壊され、その副葬品であったピュクスが偶然に J・K 2・2 号墓の墓室にまぎれ込んだ可能性も十分に考えられよう。

一方でピュクスが小片ではなく相当程度の部分が残されていたという事実は、単なる混入ではない可能性を示唆しているようにも感じられる。離れた場所からばらばらに

出土したのではなく、このピュクスの破片すべてが一箇所からまとまって発見されたのであるならば、原幾何学文様期に意図的に置かれた遺物であるという可能性も残されよう。

上記の事柄から結論するならば、この資料は墓所祭祀の可能性はあるが、しかし断定はできないということになる。

(3) アレイオス・パゴスの北東斜面において発掘されたミケーネ時代の岩室墓 I（N 21・22・1）号の羨道上層部から、中期幾何学文様期の土壙墓 N 21・6 号が発見された^⑪。調査の年次報告においては、「おそらく単なる偶然」であり、意図的にその場所を選んだわけではないと推測されている。確かに断面図によれば羨道の上端を多少掘り込んだ程度であり、岩室墓の存在を意識してこの場所を選択したのかは必ずしも明確ではない。

結論として、墓所祭祀の可能性は排除しえないが、しかし確実にそうであると見なすことは困難であろう。

(4) アゴラの北東一画で発掘されたミケーネ時代の小規模な岩室墓 X III（O 7・7）号の羨道上層部から、初期鉄器時代の墓 O 7・11 号が発見されたことがアゴラの報告書に記載されている^⑫。

ただしこの資料に関しては、情報が錯綜している。と

いうのも『ヘスペリア』二巻にその岩室墓の調査に関する年次報告が掲載されているが、岩室墓からは初期鉄器時代の墓が発掘されたという記載がない。^⑩一方でその年次報告においては初期鉄器時代の単葬墓二基に関する言及があり、C・G・ステュレニアスおよびI・レモスによれば、そのうちの一基がO7・11号墓であるという。^⑪もしもそれが正しければ、O7・11号墓は子供の土葬墓であり、年代は原幾何学文様期に属する。^⑫

詳細な情報および出土状況が不明であり判断が難しいが、O7・11号墓は岩室墓XIII(O7・7)号の羨道と一部しか重なっていないように見受けられる図面があり、^⑬必ずしもこの岩室墓の存在を意識してその場所が選択されたようにには断定できない。したがって墓所祭祀の事例と結論することには、慎重にならざるを得ないであろう。

(5) 先述のXIII(O7・7)号墓の数メートルほど東側から、ミケーネ時代の岩室墓XIV(O7・5)号が発見された。断面図から判断する限り、その玄門の数十センチメートル上方から、^⑭幾何学文様期に属する土器を使用した埋葬が発掘されている。その土器の年代、さらには土葬用の土器棺墓と火葬用の骨壺のどちらであるのかなど、詳細は不明である。

この初期鉄器時代の墓は岩室墓XIV(O7・5)号とは接

してはおらず、おそらくその存在を意識してこの場所を選択したのではないと推察する方が妥当であろう。したがって墓所祭祀の資料には、必ずしも該当しないと思われる。

以上がアゴラにおける墓所祭祀の可能性がある資料であるが、詰まるところ確実にそのように判断しうる遺構は存在しない。^⑮このようにあいまいな状況が生じる最大の要因は、この場所がミケーネ時代と同様に初期鉄器時代においても埋葬地として使用されたことにある。初期鉄器時代の墓があまりにも多数造られたために、ミケーネ時代の墓と偶然に遭遇したのか意図的にその場所を選択したのか区別が困難であり、ひいては墓所祭祀としての認定が不可能とならざるをえない。

ただし初期鉄器時代の人々が、少なくともミケーネ時代の墓の存在に気がついていたことは明らかである。それを明確に示唆する資料として、アレイオス・パゴスから出土した初期幾何学文様期の火葬墓(ARRII)がある。この墓からは土器一個と鉄剣一本という一般的な副葬品のほか、青銅製のやり先が出土した。初期鉄器時代を通じてアゴラ出土の武器は鉄製が優勢であり、青銅製はこの遺物のみという異例な品である(表2)。おそらくこのやり先は初期鉄器時代に作られたものではなく、破壊されたミケーネ時代の墓から持ってこられたものと推測されている。^⑯と

いうことは、初期鉄器時代の人々が自分たちとは異質な武器を作るミケーネ時代の人々の存在に気がついていたり、いうことは明らかであろう。そしてさらに一歩踏み込んで、それらの人々を「祖先」と認識していた可能性は否定できない。

現段階の公表資料から判断する限り、初期鉄器時代のアゴラにおいては墓所祭祀が行われていたことを明らかにすることも、またはそれを否定することも不可能である。ただし墓所祭祀に関する確実な証拠が存在しないということが、初期鉄器時代の人々がミケーネ時代の「祖先」に尊崇の念を抱いてはいなかったという解釈に結びつくわけではない。少なくとも「祖先」の存在に気がついていたことは明らかである。この問題に関しては、今後の資料の増加に期待をかけることとしたい。

おわりに

アゴラは初期鉄器時代を代表する大遺跡である。しかしケラメイコスのように墓域、アンドロス島のザゴラのように居住地と容易に性格を限定しうる遺跡とは異なり、アゴラの場合にはこれだけの資料が出土していながら、というよりもそれがゆえに、その全体像を具体的に把握すること

はなかなか難しい。決定的な解釈が困難であったり研究者により意見が分かれたりする資料も少なくはない。それでも本稿のしめくくりとして、現段階における筆者なりの若干の見解を記しておきたい。

最初に言及すべきことは、初期鉄器時代のアゴラにおいては明らかに管理および統制が行き届いた土地利用が展開されていたと判断されることであろう。中央一帯に土器工房が集中し、それを囲むように埋葬区域が点在していた。さらにその埋葬地も、何らかの要因により数箇所に区分けされていた。このような区分や配置が発展したということは、おそらく土地を使用するに際しては統制や制限が加えられていたことを示唆しており、明確な管理のもとに土地利用が展開されていたことが推察されよう。

かかるアゴラの地における人々の活動に目を向けるのであるならば、次のように要約される。すなわち、相当数の人々が土器の生産にいそしむ一方で、近親者を悲しみのうちに葬ったり墓参に訪れたりする人々が散見された。また筆者の推測によるならば、おそらくは近隣の住民たちが水を汲むために頻繁に訪れてもいたであろう。さらには宗教や信仰にも関連がある土地柄であり、また少なくともミケーネ時代の「祖先」の存在を認識しうる場でもあった。とするならば初期鉄器時代のこの場所は、古典期のアゴラ

のような公的機能は帯びていないが、しかしかなり公共性の強い性格を有していたのではないか。さらに想像をたくましくするならば、元来そのような傾向を持つ土地であったことが、のちにアゴラが建設されるに際してこの場所が選択された要因の一つであったとも見なしうるのではない⁽⁴⁾か。

このアゴラだけでも初期鉄器時代有数の大遺跡と評価しうるが、それにケラメイコスやアクロポリスの資料をもあわせて考えるならば、アテネ中心部が該期のギリシア世界における最大級の居住域であったことに疑念の余地はない。アテネ中心部における各遺跡の特徴や性格を詳細に把握し、それらの関係を有機的に組み立てていくことにより、ポリスの成立にいたるアテネ社会の具体像を解明していくことが可能となるのであろう。

アゴラからは今後も初期鉄器時代の遺物や遺構が陸続と発見されるであろう。新しい資料や報告書が発表されたあかつきには、再度検討を試みたい。

註

- (1) 拙稿「ギリシアの初期鉄器時代に関する調査および研究動向二〇〇〇〜二〇〇九年」『地中海学研究』三三(二〇〇〇・九)一―一二。
- (2) 旧アゴラの所在地について決定的に重要な知見をもたらしたアグラウロスの神域に関する碑文については、Donias 1983、旧アゴラに関する他の文献として、Martin 1951, 256-261, Oikonomides 1964, Wycherley 1966, Schnurr 1995, Papadopoulos 2003, 280-285。また旧アゴラに関しては、ウサニアスの記述(第一卷一七章一―二)との関連が問題とされてきたがその点については、Vanderpool 1974, Robertson 1998, 283-286, Papadopoulos 2003, 285。邦語では、パウサニアス、馬場恵二訳『ギリシマ案内記』(上)、岩波文庫、一九九一、八〇―八一、二二二―二二四、三〇五―三〇七。
- (3) またキユロンの反乱に焦点を当てた論考であるが、旧アゴラを含めた前古典期のトポグラフィについての関連文献として、Harris-Cline 1999, さらに前古典期の市壁と旧アゴラとの位置関係に言及がある業績として、Theoharakis 2011, 76。
- (3) 移転の理由に関する意見として、Papadopoulos 2003, 285-287。
- (4) Camp 1986, chap.3, esp.37-40, Thompson & Wycherley 1972, 19。
- (45) Miller 1995, 224, n.4, Shear Jr. 1994, esp.231, 236-239, Papadopoulos 2003, 291, 295-296, 314。トリアに於けるメッサ軍の破壊に関連がある論考として、Francis & Vickers

- 1988, Gadbery 1992, Shear Jr. 1993.
- (6) 註2および4に記載した以外で初期のアゴラに関する文献として、Camp 1994, 2005, Ammerman 1996. また概説書の類でアモラの成立および初期のアモラに関する言及がある。Osborne 1996, 225, Whitley 2001, 331-332, Hall 2007, 82.
- (7) Cf. Immerwahr 1971, chap. III, Smith 2009.
- (8) ミケーネ時代のアテネ中心部に関しては、Mountjoy 1995.
- (9) Papadopoulos 2003. この著作の評価に関しては、Kourou 2008.
- (10) 亜ミケーネ期から中期幾何学文様期にかけての資料に関する報告書が予告されているが、管見の限り未だ出版されていない (Little & Papadopoulos, 1998, 376, 379-380, n.14). *χρυσή*, Papadopoulos 2003, 5, 23.
- (11) たとえばストア・パシレイオス一帯における発掘では初期鉄器時代の多量の土器片が出土し、おそらく墓が破壊された結果によるものと推測されている (Shear Jr. 1975, 369, 370). またアモラ南東部の調査においても同様のことが推察されている (Holloway 1966, 83). *χρυσή*, Papadopoulos 2003, 273-274.
- (12) (1) アレイオス・パゴスの北斜面、(2) コロノス・アゴライオス一帯、(3) ストア・アッタロス北端一帯など、エリダノス川南岸、(4) エリダノス北岸 (Papadopoulos 1996, 121, 2003, 273, Little & Papadopoulos, 1998, 376, n.3).
- (13) アルコスやアシネなビツケーネ時代の墓域も初期鉄器時代のそれも双方が出土している集落においても、場所が移

史苑 (第七二巻第一号)

- 動している。この点に関しては、Takahashi 2009, chap. 1.
- (14) ただしアゴラにおいても変化がなかったわけではなく、複数の遺体を葬るミケーネ時代の岩室墓は使用されなくなり、亜ミケーネ期以降初期鉄器時代においては単葬墓のみが造られた。
- (15) 一九八九―一九九三年にかけてのアフロディテ・ウラニアの祭壇一帯の調査で発掘された火葬墓である (Shear Jr. 1997, 514)。しかも子供の墓であるという点が、異質性をさらに際立たせている (火葬が普及した原幾何学文様期さえ、子供は土葬が一般的である)。この墓に関しては今のところ簡略な記載しか存在せず、最終報告を待ちたい。
- (16) 例外として、I 5・5号墓の屈葬がある。ただしこの墓は長さが一・七九mあり、伸展葬でも十分に可能な大きさである。本来は伸展葬にする予定で墓壇が掘られた可能性を否定できない。
- (17) T 15・1号墓。さらにその可能性がある墓としてC 11・2号墓。
- (18) 表1を一瞥すると、未成年の墓が目立つような印象を受ける。未発表資料があるため統計的に正確な数字は出せないが、乳幼児および子供の死亡率の高さを物語っているのかもれない。
- (19) 表に記載していない火葬墓として、ターラスが言及している幾何学文様期の墓H 17・8号がある (Tarkas 1994, 167)。他の文献により確認できなかったため、表に含めなかった。ターラスが同時に言及しているN 16・3号墓に関しては表1を参照のこと。
- (20) 初期鉄器時代に関する内容ではないが古代ギリシアにお

- ける埋葬の規制に関する論考として、 Garland 1989.
- (21) アテネ中心部における初期鉄器時代の火葬に関しては、
Tarlas 1994, 151-178.
- (22) ブレーゲン¹⁾の報告論文においてはXXVII号墓と記載され
ている (Blegen 1952, 279)。D 19・4号墓という番号に関し
ては、 Goldstream 1968, 11, 2008, 11, Whitley 1991, 203.
- (23) Blegen 1952.
- (24) Coldstream 1977, 31.
- (25) Blegen 1952.
- (26) Thompson 1956, 48, Smithson 1974, 341.
- (27) Smithson 1974, 341.
- (28) Thompson 1947, 196-197, n.4, Smithson 1974, 341.
- (29) AD 19, B1, Chronika 1964, 1966, 55-56.
- (30) Dekoulakou 2003, 34, fig.3.
- (31) Popham, Sackett & Themelis (eds.) 1979 & 1980, 175-176,
T Tomb14, no.4, plate 245.
- (32) この墓の武具に関する参考文献として、 Snodgrass 1964,
94, no.10, 122, no.G3, G4, 163-164, 166, 1971, 233.
- (33) Coldstream 1977, 31, Langdon (ed.) 1993, 83. また報告論
文におおむね、戦士とみられると同時にもしかしたら職人でも
あった可能性が指摘されている (Blegen 1952, 282)。
- (34) Camp 1986, 31-32; Snodgrass 1964, 163-164.
- (35) 後期青銅器時代および初期鉄器時代の武具を伴った墓
に関する論考として、 Whitley 2002. また古代ギリシアに
おける戦死に関して、 Vermeule 1979, 84, Garland 1985,
89-93, Sourvinou-Inwood 1995, esp.191-195, 326, 344-345.
なお、「殺された」剣が出土している他の墓に関しては、
- 被葬者が騎士である可能性が示唆されているものは存在し
ない(ただしサラミスの墓については遺構や遺物の詳細は
不明)。しかし武具が出土している墓に関しては、その被葬
者は一般に戦士と見なされる傾向が強い。
- (36) たとえば「ブーン墓」(D 16・2号墓)など (Young
1949, 282)。しかしこの墓からも出土しており、葬送儀
礼に重要な役割を果たしたことが指摘されている (Blegen
1952, 280-281)。H 17・2号墓からは、おそろい豚と推測さ
れる獣骨が出土した (Burr 1933, 552)。
- (37) 後期幾何学文様期の土葬墓N 11・1号も井戸の上部から
発見されたが、これは通常とおりの墓壇が掘られ墓が造られ
ている。廃棄された井戸の上部に設けられていたのは偶然
のことだと推測されている (Thompson 1953, 39)。
またU・V 19・1a号墓の遺体が屈葬である理由は、およ
らく井戸の直径が一〇mしかなく、このと関係があるであ
らう。遺構の状況に関しては、 Little & Papadopoulos 1998,
378.
- (38) Little & Papadopoulos 1998. Cf. Papadopoulos 2000,
104-105.
- (39) Papadopoulos & Smithson 2002.
- (40) Thompson 1953, 39, Brann 1960, 413-414, 1962, 129.
- (41) Brann 1962, 72, no.368.
- (42) 後期幾何学文様期のD 16・3、G 12・2、G 12・10、G
12・14、G 12・16号墓。
- (43) 中期幾何学文様期のI 18・1号墓から二個、後期幾何学
文様期のE 14・13号墓およびG 12・17号墓から各一個出土
している。それら4個はすべて小型で同様の器形をしてお

り、胴部は球状、また胴部から口縁部にかけて把手が一つ
ついている。

(44) 原幾何学様期のO7・11号墓。

(45) アリュバロスと鉢以外に、後期幾何学文様期のG12・17
号墓から胴部が丸く蓋のために穴が開いている土器が二個
出土している(Young 1939, 85-86, XVII20-21)。おそろく
ビュクシスである。

(46) 鉄器時代への移行に関する基本文献として、Snodgrass
1964, Lemos 2002, chap.3. 邦語では、拙稿「鉄の時代―
ギリシアの初期鉄器時代に関する研究動向」『西洋史研究』
新輯三三三号、二〇〇四・九六―一〇。またギリシアの鉄器
技術に影響を与えたとも推測される西アジアに関しては、
紺谷亮一「古代オリエント考古学から見た鉄」『鉄―古くも
も進化している材料』JFE21世紀財団、二〇〇四、第一
章。

(47) 鉄製品の出土状況から初期鉄器時代における社会の変化
を読み取ろうとする業績として、Morris 1989がある。参
考になる指摘も見受けられるが、厳しい批判が提出された
自著の仮説(Morris 1987)を前提として議論展開をしてい
る上に、観念的な記述が多く、細部に関しては疑問に思わ
れる箇所も少なくない。

(48) Smithson 1968, 111-114.

(49) Young 1949, 297, no.25. の「ランズトン」の遺物を
「Hair Spiral」の項目に分類している(Langdon 2007 183,
Table 9.1, 2008, 132, Table 3.1)。

(50) Young 1949, 296-297.

(51) Morgan 1999, 336-338.

(52) Langdon 2007, 184-185, 2008, 134-137.

(53) この土器に関する主要文献として、Fraser 1940,
Papadopoulos 1999.

(54) この兄弟がシヤム双生児か否かという点に関しては、
ホメロス、松平千秋訳『イリアス(上)』、岩波文庫、
一九九二、四三〇。

(55) たゞは、Snodgrass 1998, 30-31.

(56) Dahm 2007.

(57) Smithson 1968, Coldstream 1995, Lison & Papadopoulos
2004, Morris & Papadopoulos 2004.

(58) Lison & Papadopoulos 2004.

(59) 筆者はI5.2号墓を亜シケーネ期に分類している
が、この墓を原幾何学文様期と見なす研究者も存在する
(Langdon 2007, 183, Table 9.1, 2008, 132, Table 3.1)。年代
決定の鍵となるこの墓の土器に言及がある他の文献とし
て、Ruppenstein 2007, 61, 72.

(60) 詳細な情報は不明であるが、C9・11号墓やC9・13号墓。
また未発表ではあるが、おそろくC9・4号墓も該当しよ
う。さらに被葬者が二人ではあるが、C11・4号墓にも言
及しておきた。

(61) この点に関連がある記述として、Papadopoulos &
Smithson 2002, 185-186.

(62) Shear 1940, 271, Brann 1960, 406, no.8.

(63) Papadopoulos 2003, 1. 幾ひの井戸が前七〇〇年頃に閉
鎖されるがそれに関する論考として、Camp 1979.

(64) 主な業績として、Brann 1961a, 1961b, 1962. 前古典期に
関しては、Young 1939. 初期鉄器時代の井戸から出

ギリシアにおける初期鉄器時代の遺跡 (一) アテネのアムラ (高橋)

- 土した鯨の骨に関してな Papadopoulos & Ruscillo 2002.
- (65) Camp 1986, 33, 2005, 203.
- (66) Thompson & Wycherley 1972, 9-18, esp. 16, "the household wells", Townsend 1995, 11-12. またトランの報告書
書「シリースのなごが」 Wycherley 1978, 27.
- (67) Desborough 1952, 1, 1972, 362.
- (68) Snodgrass 1971, 363, 1980, 155-156.
- (69) Coldstream 1977, 315, 1995, 393.
- (70) Morris 1987, 63-65.
- (71) Whitley 1991, 61-64.
- (72) さらに初期鉄器時代のムロスは居住されていたとどう意見を採用したか文献として Kraiker & Kübler 1939, 132, n.4, Antonaccio 1995, 119.
- (73) Lemos 2002, 135.
- (74) Papadopoulos 2003.
- (75) Papadopoulos 2003, 274.
- (76) Papadopoulos 2003, 275.
- (77) Papadopoulos 2003, 297.
- (78) Gaul & Ruppenstein 1998.
- (79) ハンテュロスは三五基以上の初期鉄器時代の井戸が出土したと記述する (Papadopoulos 2003, 1)。
- (80) 井戸 N12・3、井戸または土壇 L11・1、井戸または土壇 A20・5、井戸 K12・1、井戸 H16・17・1、井戸 P8・9、井戸 L9・9、井戸 M13・1、井戸 N11・5 (Papadopoulos 2003, 5)。
- (81) Papadopoulos 2003, 5.
- (82) Papadopoulos 2003, 275.
- (83) Papadopoulos 2003, 275.
- (84) Ammerman 1996, esp. 708.
- (85) Immerwahr 1971, 1-2.
- (86) Immerwahr 1971, 51.
- (87) Immerwahr 1971, 112, 261-262.
- (88) クラフンフェルの泉から出土している初期鉄器時代の遺物に関して、Smithson 1982, 149-154. さらに垂シカーネ期に関しては、Smithson 1977.
- また初期鉄器時代の遺物が少ないと記載されている文献として、Parsons 1943, 205-207. この報告論文によれば、当該周辺域において古典期以前で資料が少ない時代は、初期青銅器時代と初期鉄器時代 (幾何学文様期) の二つであるという。そのうち初期青銅器時代に関しては偶然に資料が少ないと見なされており、一方初期鉄器時代においてはマクロポリス一帯の居住人口が少なかったと説明されている。
- (89) Broneer 1939, 322, 324, 401-404.
- (90) Burr 1933, 566, Brann 1962, 109-110, n.2-3.
- (91) Morris 1987, 229, Whitley 1994, 225.
- (92) Burr 1933.
- (93) Burr 1933, 636, 637.
- (94) Thompson 1968, 58-60, 1978, 98-99, Thompson & Wycherley 1972, 17, n.50.
- (95) Coldstream 1977, 30, Mazarakis Ainiian 1997, 87, Papadopoulos 1996, 124, 2003, 92-93, 275, Whitley 1994, 225.
- (96) Lalonde 1968.

- (97) Cf. Thompson 1968, 58-60, 1978, 98-99.
- (98) 楕円形の遺構から出土した幾つもの土器片が、H 16・9号墓で発掘された土器片と接合された。Cf. Smithson 1968, 88, no.7, 89, no.8, no.10, no.11, no.12, 90, no.13, 97, no.24, 101, no.29, no.30, 102, no.31, no.33, no.34, 105, no.37, 106, no.39, no.40, no.41, no.42, no.44, 108, no.54, no.57, Liston & Papadopoulos 2004, 9, n.9.
- (99) Cf. Papadopoulos 2003, 275.
- (100) Mazarakis Aintian 1997, 87.
- (101) 拙稿「初期鉄器時代のアテネとアッティカ」『史学雑誌』第一一〇編第一号、二〇〇一・五〇-五三。
- (102) Townsend 1955, 200-201, Immerwahr 1971, 184, ㊦の岩室墓から古典期の土器が出土している。
- (103) Camp 2003, 254, 262, no.26.
- (104) Camp 2003, 248, fig.8, 255, fig.16. 発掘されていない部分は破壊してしまったのか、それとも保存されていないが後代の建造物の下にあるために調査ができない状態であるのかは、不明である。
- (105) Shear 1940, 292, Brann 1960, 412-413, Immerwahr 1971, 158.
- (106) Shear 1940, 292.
- (107) Shear 1940, 279, fig.15, Immerwahr 1971, pl.80.
- (108) Immerwahr 1971, 200, n.2. 幾何学文様期と記されている。
- (109) Thompson 1952, 106-107.
- (110) Styrenius 1967, 90, Lemos 2002, 230. 墓所祭祀に関する基本文献であるマントナツチオの著作においては「ステュレニアスの言及に関して何も記載がない」(Antonaccio 1995, 121, 451)。
- (111) Thompson 1952, 108, pl.27c.
- (112) Immerwahr 1971, pl.79.
- (113) Thompson 1952, 105, 106, fig.4, Immerwahr 1971, 201, pl.83.
- (114) かつて筆者はアテネ中心部の墓所祭祀に関して、アントナツチオの著作に依拠した言及を行ったことがある(拙稿「初期鉄器時代のアテネとアッティカ」『史学雑誌』第一一〇編第一号、二〇〇一・五二、註九八)。今読み返してみると、少なくともアゴラに関しては、アントナツチオの資料掌握は必ずしも十分に緻密とは言い難く、その検討内容は深みに欠けているような印象を受ける(Antonaccio 1995, 119-121)。
- (115) Smithson 1974, 342-343.
- (116) 暫定的な意見であることを強調した上で目下のところの筆者の印象を記しておくならば、アゴラ一帯はおそらく集落が管理していた土地(または複数の集落が共同で管理ないしは使用した共有地のような存在)ではなかったかと想像している。それだからこそ、アゴラの成立に際して土器工房が移転せざるを得ない状況になっても、比較的容易に事態が進展したという解釈が成立しえよう。

桜井万里子「ポリス社会の空間構造―アテナイにおける古典期アゴラの成立」『年報都市研究』一二、都市史研究会編集、山川出版社(二〇〇四・四五-五四)においては「井戸を含め土器製作所が所在した土地は私有財産ですから、アゴラ成立に当たっては当該地が私有から公有に転換したことになりません」(五〇頁)という見解が提示されているが、

ギリシアにおける初期鉄器時代の遺跡 (一) アテネのアゴラ (高橋)

土器工房の土地をその井戸が私的に所有されていたという解釈は可能性 (または仮説) の一つにすぎないと断言するのはなかなか。また墓域に関しては言及がなかなか。墓域を私有地とする意見は多いなか。

文献一覽

- Deposit, *Hesperia* 2, 542-640.
- Camp, J.M., II. 1979: A Drought in the Late Eighth Century B.C., *Hesperia* 48, 397-411.
- 1986: *The Athenian Agora—Excavations in the Heart of Classical Athens*, London.
- 1994: Before Democracy: Alkmaionidai and Peisistratidai, in Coulson, Palagia, Shear Jr., Shapiro & Frost (eds.), 1994, 7-12.
- 1996: Excavations in the Athenian Agora: 1994 and 1995, *Hesperia* 65, 231-261.
- 1999: Excavations in the Athenian Agora: 1996 and 1997, *Hesperia* 68, 255-283.
- 2003: Excavations in the Athenian Agora: 1998-2001, *Hesperia* 72, 241-280.
- 2005: The Origins of the Classical Agora, in E.Greco (ed.), *Teseo e Romolo. Le Origini di Atene e Roma a Confronto—Atti del Convegno Internazionale di Studi, Scuola Archeologica Italiana di Atene, Atene, 30 Giugno-1 Luglio 2003*, Tripodes 1, 197-209.
- 2007: Excavations in the Athenian Agora: 2002-2007, *Hesperia* 76, 627-663.
- Coldstream, J.N. 1968: *Greek Geometric Pottery: A Survey of Ten Local Styles and their Chronology*, London.
- 1977: *Geometric Greece*, London.
- 1995: The Rich Lady of the Areiopagos and her Contemporaries—A Tribute in Memory of Evelyn Lord Smithson, *Hesperia* 64, 391-403.
- Ammerman, A.J. 1996: The Eridanos Valley and the Athenian Agora, *AMA* 100, 699-715.
- Angel, J.L. 1945: Skeletal Material from Attica, *Hesperia* 14, 279-363.
- Antonaccio, C.M. 1995: *An Archaeology of Ancestors—Tomb Cult and Hero Cult in Early Greece*, Lanham.
- Blegen, C.W. 1952: Two Athenian Grave Groups of About 900 B.C., *Hesperia* 21, 279-294.
- Brann, E. 1960: Late Geometric Grave Groups from the Athenian Agora, *Hesperia* 29, 402-416.
- 1961a: Late Geometric Well Groups from the Athenian Agora, *Hesperia* 30, 93-146.
- 1961b: Protoattic Well Groups from the Athenian Agora, *Hesperia* 30, 305-379.
- 1962: *The Athenian Agora VIII: Late Geometric and Protoattic Pottery—Mid 8th to Late 7th Century B.C.*, Princeton.
- Broneer, O. 1939: A Mycenaean Fountain on the Athenian Acropolis, *Hesperia* 8, 317-433.
- Burr, D. 1933: A Geometric House and a Proto-Attic Voive

- 2008: *Greek Geometric Pottery: A Survey of Ten Local Styles and their Chronology*. Updated second edition, Bristol.
- Coulson, W.D.E., O.Palagia, T.I.Shear Jr, H.A.Shapiro & F.J.Frost (eds.) 1994: *The Archaeology of Athens and Attica under the Democracy—Proceedings of an International Conference Celebrating 2500 Years since the Birth of Democracy in Greece, held at the American School of Classical Studies at Athens, December 4-6, 1992*, Oxford.
- Dahm, M.K. 2007: Not Twins At All—The Agora Oinochoe Reinterpreted, *Hesperia* 76, 717-730.
- Dekoulakou, I. 2003: Ανασκαφικές Έργους στην Σάλαμνα—Excavations on Salamina, in E.Κουροδάρη-Παννονοπούλου (ed.), *ΑΡΧΑΙΟΛΟΓΙΚΟΣ: Παρτικὰ Του Δεθνοῦς Ἑνωθίου Ιστορίας και Αρχαιολογίας του Αγορασφαιρικού, Πόρος, 26-29 Ιουνίου 1998, Τόμος Β—Από τους Ἐκτελεστικούς Χοίρους εἰς το Τέλος της Ρεζιμινοπαρίας*, Athens, 29-44.
- Desborough, V.R.d' A. 1952: *Protogeometric Pottery*, Oxford.
- 1972: *The Greek Dark Ages*, London.
- Dontas, G.S. 1983: The True Aglaurion, *Hesperia* 52, 48-63.
- Francis, E.D. & M.Vickers 1988: The Agora Revisited: Athenian Chronology c.500-450 BC, *BSA* 83, 143-167.
- Fraser, A.D. 1940: The Geometric Oenochoe with Crossed Tubes from the Athenian Agora, *AJA* 44, 457-463.
- Gadberg, L.M. 1992: The Sanctuary of the Twelve Gods in the Athenian Agora: A Revised View, *Hesperia* 61, 447-489.
- Garland, R. 1985: *The Greek Way of Death*, New York.
- 1989: The Well-Ordered Corpse: An Investigation into the Motives behind Greek Funerary Legislation, *BICS* 36, 1-15.
- Gaub, W. & F.Ruppenstein 1998: Die Athener Akropolis in der Frühen Eisenzeit, *AM* 113, 1-60.
- Hall, J.M. 2007: *A History of the Archaic Greek World, ca.1200-479 BCE*, Malden/Oxford/Carlton.
- Harris-Cline, D. 1999: Archaic Athens and the Topography of the Kylon Affair, *BSA* 94, 309-320.
- Holloway, R.R. 1966: Exploration of the Southeast Stoa in the Athenian Agora, *Hesperia* 35, 79-85.
- Immerwahr, S.A. 1971: *The Athenian Agora XIII: The Neolithic and Bronze Ages*, Princeton.
- Kourou, N. 2008: Review of "J.K.Papadopoulos, *Ceramics Redivivus: The Early Iron Age Potters' Field in the Area of the Classical Athenian Agora*", *Hesperia Supplement* 31, The American School of Classical Studies at Athens, Princeton, 2003", *AJA* 112, 773-774.
- Kraiker, W. & K.Kühler 1939: *Keramikos: Ergebnisse der Ausgrabungen I—Die Nekropolen des 12. bis 10. Jahrhunderts*, Berlin.
- Lalonde, G.V. 1968: A Fifth Century Hieron Southwest of the Athenian Agora, *Hesperia* 37, 123-133.
- Langdon, S. 2007: The Awkward Age: Art and Maturation in Early Greece, in A.Cohen & J.B.Rutter (eds.), *Constructions of Childhood in Ancient Greece and Italy*, *Hesperia Supplement* 41, 173-191.
- 2008: *Art and Identity in Dark Age Greece, 1100-700 B.C.E.*, Cambridge.

- Langdon, S. (ed.) 1993: *From Pasture to Pois—Art in the Age of Homer*, Columbia & London.
- Lemos, I.S. 2002: *The Protohistoric Aegean—The Archaeology of the Late Eleventh and Tenth Centuries BC*, Oxford.
- Liston, M.A. & J.K.Papadopoulos 2004: The "Rich Athenian Lady" was Pregnant—The Anthropology of a Geometric Tomb Reconsidered, *Hesperia* 73, 7-38.
- Little, L.M. & J.K.Papadopoulos, 1998: A Social Outcast in Early Iron Age Athens, *Hesperia* 67, 375-404.
- Martin, R. 1951: *Recherches sur l'Agora Grecque*, Paris.
- Mazarakis Ainian, A. 1997: *From Rulers' Dwellings to Temples: Architecture, Religion and Society in Early Iron Age Greece (1100-700 B.C.)*, Jonsered.
- Miller, S.G. 1995: Architecture as Evidence for the Identity of the Early Polis, in M.H.Hansen (ed.), *Sources for the Ancient Greek City-State: Symposium, August 24-27, 1994*, Acts of the Copenhagen Polis Centre 2, Copenhagen, 201-244.
- Morgan, C. 1999: *Isthmia VIII—The Late Bronze Age Settlement and Early Iron Age Sanctuary*, Princeton.
- Morris, I. 1987: *Burial and Ancient Society—The Rise of the Greek City-State*, Cambridge.
- 1989: Circulation, Deposition and the Formation of the Greek Iron Age, *Man* (New Series) 24, 502-519.
- Morris, S.P. & J.K.Papadopoulos 2004: Of Granaries and Games: Egyptian Stowaways in an Athenian Chest, in A.P.Chapin (ed.), *XAPIZ: Essays in Honor of Sara A. Immerwahr*, Hesperia Supplement 33, 225-242.
- Mountjoy, P.A. 1995: *Mycenaean Athens*, Jonsered.
- Oikonomides, A.N. 1964: *The Two Agoras in Ancient Athens—A New Commentary on their History and Development, Topography and Monuments*, Chicago.
- Osborne, R. 1996: *Greece in the Making 1200-479 BC*, London & New York.
- Papadopoulos, J.K. 1996: The Original Kerameikos of Athens and the Siting of the Classical Agora, *GRBS* 37, 107-128.
- 1999: Tricks and Twins: Nestor, Aktorione-Molione, the Agora Oinochoe and the Potter Who Made Them, in P.P. Betancourt et al. (eds.), *Meletemata: Studies in Aegean Archaeology Presented to Malcolm H. Wiener as He Enters his 65th Year*, Aegaeum 20, Liège, 633-640.
- 2000: Skeletons in Wells: Towards an Archaeology of Social Exclusion in the Ancient Greek World, in J.Hubert (ed.), *Madness, Disability and Social Exclusion—The Archaeology and Anthropology of 'Difference'*, London & New York, 96-118.
- 2003: *Ceramicus Redivivus—The Early Iron Age Potters' Field in the Area of the Classical Athenian Agora*, Hesperia Supplement 31.
- Papadopoulos, J.K. & D.Ruscillo 2002: A *Ketos* in Early Athens: An Archaeology of Whales and Sea Monsters in the Greek World, *AJA* 106, 187-227.
- Papadopoulos, J.K. & E.L.Smithson 2002: The Cultural Biography of a Cycladic Geometric Amphora—Islanders in Athens and the Prehistory of Metics, *Hesperia* 71, 149-199.

- Papadopoulos, J.K., J.F.Vedder & T.Schreiber 1998: Drawing Circles: Experimental Archaeology and the Pivoted Multiple Brush, *AJA* 102, 507-529.
- Parsons, A.W. 1943: Klepsydra and the Paved Court of the Pythion, *Hesperia* 12, 191-267.
- Popham, M.R., L.H.Sackett & P.G.Themelis (eds.) 1979 & 1980: *Leikandi I: The Iron Age—The Settlement, The Cemeteries*, Oxford, 1979 (plates), 1980 (text).
- Robertson, N. 1998: The City Center of Archaic Athens, *Hesperia* 67, 283-302.
- Ruppenstein, F. 2007: *Keramikos: Ergebnisse der Ausgrabungen XVIII—Die Submykenische Nekropole: Neufunde und Neubewertung*, München.
- Schnurr, Ch. 1995: Die Alte Agora Athens, *ZPE* 105, 131-138.
- Shear, T.L. 1933: The Campaign of 1932, *Hesperia* 2, 451-474.
- 1935: The Campaign of 1934, *Hesperia* 4, 340-370.
- 1936: The Campaign of 1935, *Hesperia* 5, 1-42.
- 1937: The Campaign of 1936, *Hesperia* 6, 333-381.
- 1938: The Campaign of 1937, *Hesperia* 7, 311-362.
- 1940: The Campaign of 1939, *Hesperia* 9, 261-308.
- 1941: The Campaign of 1940, *Hesperia* 10, 1-8.
- Shear Jr., T.L. 1973a: The Athenian Agora: Excavations of 1971, *Hesperia* 42, 121-179.
- 1973b: The Athenian Agora: Excavations of 1972, *Hesperia* 42, 359-407.
- 1975: The Athenian Agora: Excavations of 1973-1974, *Hesperia* 44, 331-374.
- 1993: The Persian Destruction of Athens—Evidence from Agora Deposits, *Hesperia* 62, 383-482.
- 1994: 'Ισοψούς τ' Ἀθίνας ἐνούποτης: The Agora and the Democracy, in Coulson, Palagia, Shear Jr., Shapiro & Frost (eds.) 1994, 225-248.
- 1997: The Athenian Agora: Excavations of 1989-1993, *Hesperia* 66, 495-548.
- Smith, S.K. 2009: Skeletal Evidence for Militarism in Mycenaean Athens, in L.A.Schepartz, S.C.Fox & C.Bourbou (eds.), *New Directions in the Skeletal Biology of Greece*, Hesperia Supplement 43, 99-109.
- Smithson, E.L. 1961: The Protogeometric Cemetery at Nea Ionia, 1949, *Hesperia* 30, 147-178.
- 1968: The Tomb of a Rich Athenian Lady, ca.850 B.C., *Hesperia* 37, 77-116.
- 1974: A Geometric Cemetery on the Areopagus: 1897, 1932, 1947, *Hesperia* 43, 325-390.
- 1977: "Submycenaean" and LHIIIC Domestic Deposits in Athens, *AJA* 81, 78-79.
- 1982: The Prehistoric Klepsydra: Some Notes, in *Studies in Athenian Architecture, Sculpture and Topography—Presented to Homer A. Thompson*, Hesperia Supplement 20, 141-154.
- Snodgrass, A.M. 1964: *Early Greek Armour and Weapons from the End of the Bronze Age to 600 B.C.*, Edinburgh.
- 1971: *The Dark Age of Greece: An Archaeological Survey of the Eleventh to the Eighth Centuries BC*, Edinburgh.

- 1980: *Archaic Greece: The Age of Experiment*, Berkeley & Los Angeles.
- 1998: *Homer and the Artists—Text and Picture in Early Greek Art*, Cambridge.
- Sourvinou-Inwood, C. 1995: *Reading Greek Death—To the End of the Classical Period*, Oxford.
- Styrenius, C.-G. 1967: *Submycenaean Studies*, Lund.
- Takahashi, Y. 2009: Τα Έθνη Ταφής στην Αρκαΐδα: Από τη Μεταναστευτική έως και την Προπολεμική Περίοδο, Ph.D thesis, University of Athens.
- Taras, S. 1994: *Social Change, Organisation and Cremation in Prehistoric Greece*, Ph.D thesis, University of Liverpool.
- Theoharaki, A.M. 2011: The Ancient Circuit Wall of Athens: Its Changing Course and the Phases of Construction, *Hesperia* 80, 71-156.
- Thompson, H.A. 1947: The Excavation of the Athenian Agora 1940-1946, *Hesperia* 16, 193-213.
- 1948: The Excavation of the Athenian Agora Twelfth Season: 1947, *Hesperia* 17, 149-196.
- 1950: Excavations in the Athenian Agora: 1949, *Hesperia* 19, 313-337.
- 1952: Excavations in the Athenian Agora: 1951, *Hesperia* 21, 83-113.
- 1953: Excavations in the Athenian Agora: 1952, *Hesperia* 22, 25-56.
- 1954: Excavations in the Athenian Agora: 1953, *Hesperia* 23, 31-67.
- 1956: Activities in the Athenian Agora: 1955, *Hesperia* 25, 46-68.
- 1968: Activity in the Athenian Agora: 1966-1967, *Hesperia* 37, 36-72.
- 1978: Some Hero Shrines in Early Athens, in W.A.P. Childs (ed.), *Athens Comes of Age: From Solon to Salamis*, Princeton, 96-108.
- Thompson, H.A. & R.E. Wycherley 1972: *The Athenian Agora XIV: The Agora of Athens—The History, Shape and Uses of an Ancient City Center*, Princeton.
- Townsend, E.D. 1955: A Mycenaean Chamber Tomb under the Temple of Ares, *Hesperia* 24, 187-219.
- Townsend, R.F. 1995: *The Athenian Agora XXVII: The East Side of the Agora—The Remains beneath the Stoa of Attalos*, Princeton.
- Vanderpool, E. 1974: The "Agora" of Pausanias I, 17, 1-2, *Hesperia* 43, 308-310.
- Vernmeule, E. 1979: *Aspects of Death in Early Greek Art and Poetry*, Berkeley, Los Angeles & London.
- Whitley, J. 1991: *Style and Society in Dark Age Greece—The Changing Face of a Pre-literate Society 1100-700 BC*, Cambridge.
- 1994: The Monuments That Stood before Marathon: Tomb Cult and Hero Cult in Archaic Attica, *AJA* 98, 213-230.
- 2001: *The Archaeology of Ancient Greece*, Cambridge.
- 2002: Objects with Attitude: Biographical Facts and

図版掲載一覧

- Fallacies in the Study of Late Bronze Age and Early Iron Age Warrior Graves, *CAJ* 12, 217-232.
- Mycherley, R.E. 1966: Archaisia Agora, *Phoenix* 20, 285-293.
- 1978: *The Stones of Athens*, Princeton.
- Young, R.S. 1939: *Late Geometric Graves and a Seventh Century Well in the Agora*, *Hesperia Supplement* 2.
- 1949: An Early Geometric Grave near the Athenian Agora, *Hesperia* 18, 275-297.
- 1951a: Sepulturae Intra Urbem, *Hesperia* 20, 67-134.
- 1951b: An Industrial District of Ancient Athens, *Hesperia* 20, 135-288.
- ☒ 1 Papadopoulos 2003, 2, fig.1. 2.
- ☒ 2 Shear Jr. 1975, pl.83.c (Gravel5:3).
- ☒ 3 1 Blegen 1952, 280, fig. 1.
- ☒ 3 2 Blegen 1952, 280, fig. 2.
- ☒ 4 American School of Classical Studies at Athens, *The Athenian Agora: A Guide to the Excavation and Museum*, 3rd ed., Athens, 1976, 230, fig.120.
- ☒ 4 1 American School of Classical Studies at Athens, *The Athenian Agora: A Guide to the Excavation and Museum*, 3rd ed., Athens, 1976, 232, fig. 121.
- ☒ 4 2 Dahm 2007, 728, fig. 8.
- ☒ 5 American School of Classical Studies at Athens, *The Athenian Agora: A Guide to the Excavation and Museum*, 4th ed., Athens, 1990, 231, fig. 141.
- ☒ 6 Brann 1962, 109, fig. 8.
- ☒ 7 Liston & Papadopoulos 2004, 10, fig. 2. (方位は筆者が加筆)
- ☒ 8 Townsend 1955, 190, fig. 1.
- ☒ 9 Camp 2003, 262, fig. 26.

(本学兼任講師)

表 1 アゴラおよびその周辺地域出土の初期鉄器時代の墓¹

遺構名/ 場所 ² / 調査年	時代	葬法	墓 ³	被葬者	副葬品 (各副葬品のあとの 数字は出土数 ⁴)	文献
Gr.B10:2	SM? ¹	?	?	?	?	未発表? (Cf. Whitley 1991, 206)
Gr.C9:3 (VI)	SM(?)	土葬	土壇墓	子供2人	? (少なくとも青銅製指輪1)	未発表 (Cf. Styrenius 1967, 31, 35, 36-37, 48, Whitley 1991, 201, Mountjoy 1995, 65)
Gr.D7:1(IV) ⁵ , ヘラテイストス神殿 西方 ⁶	SM	土葬	周石墓? ⁷ (板石で蓋)	子供 (幼児?) ⁸	土器2	Shear 1937, 364, 366, fig.28, Papadopoulos & Smithson 2002, 157, fig.5
Gr.I5:2, ストア・パシレイオ ス, 1973	SM ⁹	土葬 (伸展葬)	石棺墓 (1.43 × 0.45m, 深さ 0.44m, 方位は南西-北東、頭蓋骨は南西)	20歳前後の 女性	土器2 (1個からは青銅片出土)、青銅製ピン1、青銅製フレイブラ4、指輪13 (簡素な青銅製8、骨製で飾り部分は盾形1、盾形装飾品付きの青銅製3)	Shear Jr. 1975, 371-372
Gr.I5:3, ストア・パシレイオ ス, 1973	SM ¹⁰	土葬 (伸展葬)	石棺墓 (1.64 × 0.43m, 深さ 0.44m, 板石で蓋、方位は南西-北東、頭蓋骨は南西)	成人女性 (28歳前後)	土器1	Shear Jr. 1975, 371-373, Papadopoulos, Vedder & Schreiber 1998, 516, fig.6, 517, n.63
Gr.I5:4, ストア・パシレイオ ス, 1973	SM	土葬 (伸展葬)	石棺墓 (0.98 × 0.25-0.32m, 深さ 0.25-0.30m, 2層の板石による蓋、方位は南西-北東、頭蓋骨は南西)	子供 (8-12歳)	土器1	Shear Jr. 1975, 372-373
Gr.I5:5, ストア・パシレイオ ス, 1973	SM	土葬 (屈葬)	石棺墓 (1.79 × 0.39-0.49m, 深さ 0.30m, 方位は南西-北東、頭蓋骨は南西)	50歳前後の 女性	土器1	Shear Jr. 1975, 372-373

Gr.J2:10, アゾラ北西部, 1996-7	? (SM?) ¹¹	土葬 (伸展葬)	土壇墓 (1.63 × 0.35m, 深さ 0.35m, 方位は西-東, 頭蓋骨は西)	成人男性	無し	Camp 1999, 263-265
Gr.?, アゾラ北西部, 1989-93	SM ¹²	火葬	火葬骨壺 (アソフオラ)	子供	無し	Shear Jr. 1997, 514
Gr.J2:11, アゾラ北西部, 1996-7	SM	土葬 (伸展葬)	土壇墓 (頭蓋骨は西)	17 ~ 18 歳前後の女性	土器 2 ¹³	Camp 1999, 265
Gr.J9:2(XXXIV) ¹⁴ , オゾイオン西方, 1952	SM ¹⁵	土葬 ¹⁶	土壇墓	成人 ¹⁷	土器 2	Thompson 1953, 41-42
Gr.M16-17:1(II) ¹⁸ , 調査区 Phi, 1937	SM ¹⁹	おそらく土葬	? (方位は南-北, 頭蓋骨は南)	成人女性 ²⁰	土器 1	Shear 1938, 325, Angel 1945, 301, no.54, Papadopoulos, Veddler & Schreiber 1998, 516, fig.7, 517, n.64
Gr.N16:1, 調査区 Phi, 1937	SM	? (伸展葬)	土壇墓? ²¹	? 33歳前後の女性	? 土器 2	未発表? (Shear 1938, 325?) (Cl. Mountjoy 1995, 65, Whitley 1991, 206)
Gr.T15:2, アゾラ東部, 1972	SM	土葬 (伸展葬)	土壇墓 (1.65 × 0.63m, 方位は南-北, 頭蓋骨は南)	33歳前後の女性	土器 2	Shear Jr. 1973b, 398-399, pl.73a, b
Gr.C9:5 (VII)	SM/PG or PG?	土葬	土壇墓 (アソフオラとピソスの破片で蓋)	幼児	? (副葬品なし) ²²	未発表 (Cl.Styrenius 1967, 76, 78-83, Whitley 1991, 201, Lemos 2002, 230)
Gr.C11:1 (VIII)	SM/PG or PG?	土葬	土壇墓	幼児	? (土器 1) ²³	未発表 (Cl.Styrenius 1967, 76, 78-80, 82, 83, Whitley 1991, 202, Lemos 2002, 230)
Gr.D6:4 (V)	SM/PG ²⁴	土葬	? (方位は南東-北西)	子供	? (土器 1) ²⁵	未発表 (Cl.Styrenius 1967, 59, 64, 66-71, 133, fig.38, Whitley 1991, 202, Lemos 2002, 9, 230)
Gr.I5:1, ストラ・パシレイオス, 1973	SM/PG	土葬 (伸展葬) ? ²⁶	土壇墓 (墓壇は不整形, 頭蓋骨は東)	子供	土器 1 ²⁷	Shear Jr. 1975, 373-374

ギリシアの古代の埋葬施設とその遺物 (一) アテネのイコン (埋葬)

Gf.T16:1, アテネ南東部, 1965	SM/ PG ³⁸	土葬	石棺墓	成人男性	土器 1	Holloway 1966, 82-83
Gf.: ²⁹ , 調査区 Phi, 1937	SM or PG?	土葬?	? (頭蓋骨は南)	幼児	(墓の上から) 土器 1	Shear 1938, 325
Gf.B10:1 (XIX)	PG	?	土器棺墓 (粗製のアソフオラが棺)	幼児	?	未発表 (Cf.Styrenius 1967, 91, 96, Whitley 1991, 201, Lemos 2002, 230)
Gf.C9:4 (XII) ³⁰ , コロノス・アテライ オス	PG	火葬	土壇墓? (火葬骨壺ではなく、墓壇 に火葬された遺骸を埋葬)	?	? (少なくとも土器 9) ³¹	未発表 (Cf.Smithson 1974, 331, n.17, Styrenius 1967, 90, 93, 95, 101, 104, 111, 112, n.37, 113, Whitley 1991, 201, Lemos 2002, 230)
Gf.C9:8 (XXXV) ³²	PG	?	?	?	?	Blegen 1952, 282, 285
Gf.C9:9 (XV)	PG	火葬	火葬骨壺 (アソフオラ、アソフオラ の蓋としてカラソス)	?	? (少なくとも、土器 1 ³³ 、鉄 製ビン 1、鉄製アソフオラ ³⁴)	未発表 (Cf.Styrenius 1967, 90-94, 100, 101, 109, 110, Whitley 1991, 202, Lemos 2002, 230)
Gf.C9:10 (XIII)	PG	火葬	火葬骨壺 (?) ³⁵	?	? (少なくとも、土器 1、鉄 製ビン 2、鉄製アソフオラ 2、 石製紡錘車 1) ³⁶	未発表 (Cf.Styrenius 1967, 90, 91, 94, 98, 100, 101, 107, 109-110, 111, Smithson 1968, 81, n.19, Whitley 1991, 202, Lemos 2002, 230)
Gf.C9:11 (XX) ³⁷ , 1936	PG	土葬	土壇墓 (0.97m) ³⁸	?	? (土器 8、鉄製アソフオラ) ³⁹	Shear 1937, 368, fig.31
Gf.C9:13 (XXII) ⁴⁰ , 1936	PG	火葬	火葬骨壺 (アソフオラ ⁴¹)	?	土器? (最低でも 9?) ⁴² 、 鉄製ビン 2、鉄製アソフオラ 2 ⁴³ 、銅状鉄製品 1、鉄片 1、青銅片 1、その他? ⁴⁴	Shear 1937, 368

Gr.C9:14(XXI)	PG	火葬	土壇墓? (火葬骨壺ではなく、墓壇 に火葬した遺骨を埋葬)	?	? (武器や装飾品はなし)	未発表 (Cf.Styrenius 1967, 90, 95, 101, Whitley 1991, 202, Lemos 2002, 230 ⁴⁵)
Gr.C10:2(XVIII)	PG	?	土器棺墓 (粗製のアンフオラが棺、そ の蓋として大きい土器片)	幼児	?	未発表 (Cf.Styrenius 1967, 91, 96, Whitley 1991, 202, Lemos 2002, 230)
Gr.C11:2(X) ⁴⁶ , 1936	PG	土葬	土壇墓 (長さ1.72m、幅0.70m) ⁴⁷	成人? ⁴⁸	土器 6	Shear 1937, 368
Gr.C11:4(QX) ⁴⁹ , 1935	PG	土葬 (伸展葬)	土壇墓 (方位は南東-北西、頭部 は南東)	子供2名	土器 12	Shear 1936, 23-24
Gr.D6:3 (I)	PG? ⁵⁰	火葬	?	?	?	未発表 (Cf.Styrenius 1967, 32, 35-36, Whitley 1991, 201, Mountjoy 1995, 65-66, n.255)
Gr.D6:6?	PG?	?	?	?	?	? (Cf.Whitley 1991, 202)
Gr.E12:1? ⁵¹	PG?	?	?	?	? ⁵²	? (Cf.Whitley 1991, 202)
Gr.F9:1(XIV) ⁵³ , ヘンライオストス神殿 南東 ⁵⁴ , 1936	PG	土葬	周石墓	子供	青銅製フイブラ 1、青銅製 コイル状装飾品 3、土器 8	Shear 1937, 364-365, 367, figs.29-30
Gr.F16:3 ³⁵ , アレイオス・パオス 北斜面麓, 1932	PG	火葬	火葬骨壺 (アンフオラ、アンフオラ の蓋としてビュクシス)	?	土器 ⁵⁵ 、鉄製フイブラ ² ⁵⁷ 、鉄製ピソ ²	Shear 1933, 468-470
Gr.F16:4(XXIII) ⁵⁸ , アレイオス・パオス 北斜面麓, 1932	PG (?) ⁵⁰	火葬	火葬骨壺 (アンフオラ)	?	?	Shear 1933, 468

キリシタンと関係する朝鮮語の類語 (一) アンケのイコト (埋葬)

Gf.:?, アレス神殿, 岩室墓周辺, 1951	PG	火葬	?	(おそらくアレス神殿が建立された際に破壊)	?	少なくとも土器 1?	Townsend 1955, 200, 217, no.36, pl.77, no.36, Immervahr 1971, 184
Gf.J7:1(XXXXVII) ⁶⁰ , アレス神殿, 岩室墓の羨道, 1951	PG	土葬 (伸展葬)	周石墓 (内部は長さ1.40m, 幅0.45m, 頭蓋骨は南東)	子供 (5歳)	土器 2	(少なくとも鉄製ペン1、鉄製ナイフ1)	Townsend 1955, 190, fig.1, 200-201, 218, no.37, 38, pl.72, b, pl. 77, no.37, 38, Immervahr 1971, 184
Gf.:J9:1(XL)?	PG	火葬	土壙墓 (骨壺を伴わない火葬墓)	?	?	(少なくとも鉄製ペン1、鉄製ナイフ1)	未発表? (Styrenius 1967, 90, 95, 101, 109, Lemos 2002, 153-154, n.21, 230 ⁶¹)
Gf.:? ⁶² , 調査区 Phi, 1937	PG	火葬	火葬骨壺 (おそらくアソフオラ)	?	土器 1	?	Shear 1938, 325
Gf.:NI6:4(XLVI)?	PG?	?	?	?	?	?	未発表 (Cf:Styrenius 1967, 88)
Gf.:O7:6(XXXXVIII)	PG	土葬	土器棺墓 (粗製アソフオラ, 大きな土器片で蓋)	6ヶ月の胎児	?	?	未発表 (Cf:Styrenius 1967, 91, 96, 97, Whitley 1991, 202, Lemos 2002, 230 ⁶³)
Gf.:O7:11(XXXXIX) ⁶⁴ , アユラ北東部, 1951	PG	土葬	周石墓 (ただし周石があるのは一つの壁面のみ) ⁶⁵	子供	土器 5 (うち1個は手づくね土器)	?	Thompson 1952, 108, pl.27c
Gf.:Q8:5(XLI) ⁶⁶ , アツタロスのストア, 1953	PG	土葬	おそらく石棺墓 ⁶⁷	?	土器 6 ⁶⁸	?	Thompson 1954, 58
Gf.:Q8:6(XLII) ⁶⁹ , アツタロスのストア, 1953	PG	土葬 (伸展葬)	石棺墓 (頭蓋骨は南)	子供	土器 5、青銅製ペン1、青銅製球付き鉄製ペン1、青銅製アレスレット2、青銅製指輪 1	?	Thompson 1954, 58, pl.16a, c
Gf.:Q8:7(XLIII) ⁷⁰ , アツタロスのストア, 1953	PG	土葬	土壙墓 ⁷¹	?	土器 3 ⁷²	?	Thompson 1954, 58

Gr. J15:1. アテラ東部 ⁷³ , 1972	PG	土葬 (伸展葬)	土壙墓 1.70 × 0.67 m、方位は南 —北)	44 歳前後の 女性	土器 4 (そのうち 1 個は手 づくね土器)、紡錘車 1	Shear Jr. 1973b, 399-400, pl.73c, d
Gr. C9:8	EG	?	?	?	?	未 葬 表? (Cf. Coldstream 1968, 10, 2008, 10, Whitley 1991, 202)
Gr. D16:2 (XXV1) ⁷⁴ , 「アーツ墓」, 1948	EG	火葬	火葬骨壺 (アソフオラ、蓋付きのピ エクシスがアソフオラの 蓋として乗せられていた)、 骨壺上方に板石による覆い	? ⁷⁵	土器 23 ⁷⁶ 、グーツ型土製品 2組、小型環状土製品 1 (直 径 2.5 cm)、金属製リソフ 1 組 ⁷⁷ 、青銅製ペン ⁷⁸ 、青 銅製フイアラ ⁷⁹ 2、円筒形骨 製品 1、鉄製ナイフ 1	Young 1949
Gr. D16:4 (XXV1D) ⁷⁸ , 「戦士の墓」, 1949	EG	火葬 ⁷⁹	火葬骨壺 (アソフオラ、石で蓋)、 墓の表面に配石	成人 男性 (34 歳前後)	土器 6、鉄剣 1、鉄製やり 先 2、鉄製ナイフ 2、鉄製 斧 1、鉄製の刃 1 ⁸⁰ 、鉄製は み 2、鉄製掛け金 (?) 1 ⁸¹ 、 骨製品 2、土製品 1 ⁸²	Blegen 1952
(Gr.?) F16:5 ⁸³	EG ⁸⁴	?	? (墓そのものは出土しなかつたのか?) ⁸⁵	?	?	? (Cf. Coldstream 1968, 10, 2008, 10, Whitley 1991, 202)
Gr. H16:6, 「富裕なアテナ婦人の墓」, アレイオス・パ ゴス麓, 1967	EG	火葬	火葬骨壺 (アソフオラ、カップで蓋)	1) 30-35 歳前 後の女性、 妊娠中または出産時に 死亡 2) 32-36 週 の胎児 (おそらく出生 前、母親が妊娠中に火 葬)	土器 31 ⁸⁶ 、穀倉形土製品 2、 手づくね尖底ピエクシス 12、 手づくねピエクシスの蓋 7、 球状土製品 4、紡錘車 2、 土製ピース 4、青銅球付き 鉄製ペン 1、青銅製ペン 3、 青銅製フイアラ 2、青銅製 指輪 1、金製指輪 6、金製 耳飾り 1 組、フイアラペンや ガラスなどのピースによるネ ックレス 1、象牙製円盤 1	Smithson 1968, Coldstream 1995, Liston & Papadopoulos 2004, Morris & Papadopoulos 2004

キリシタン墓の分布と埋葬形態の調査 (一) トクノノコト (埋葬)

Gf.H17:2, 幾何学文様期の建物の床下, 1932	EG	土葬 (伸展葬?)	土壇墓 (墓壇はほぼ長方形, 1.00 × 0.40m, 方位はほぼ南東—北西、頭蓋骨は東)	4-6 歳前後の子供	土器 5、足形土製品 1、球状土製品 1、貝殻 2	Burr 1933, 552-553
Gf.K20:2	EG	?	土壇墓 (ほぼ円形)	?	?	Brann 1962, 129
Gf.N16:4 ⁸⁷ , 南のストア I 周辺, 1955	EG (?) ⁸⁸	火葬	火葬骨壺 (アソフオラ)	?	土器 3、鉄製の刃物 (のこぎり?) ⁸⁹ 1、鉄製ナイフ 1、鉄製剣 1	Thompson 1956, 48-49
Gf.R20:1 ⁹⁰ , アレイオス・パズス 北東斜面, 1938, 1944	EG	火葬	火葬骨壺 (アソフオラ、土器で蓋をされていた可能性あり)	?	土器 2、鉄製剣 1、鉄製ナイフ 1、鉄片 (ペン?) 1	Thompson 1947, 196-197
Gf.U-V19:1a, エレウシニオン, 1959	EG(?)	土葬 (屈葬)	井戸 U-V19:1 の覆土より発見 (板石の上に遺体、頭蓋骨は南東)	成人男性 (38~56歳) ⁹¹	土器 1 (?) ⁹²	Little & Papadopoulos 1998
Gf.ARII, アレイオス・パズス, 1897	EG	火葬	周石墓 (ただし周石は一つの壁面のみ, 1.10 × 0.58m)	?	土器 1、鉄製剣 1、青銅製やり先 1 ⁹³	Smithson 1974, 340-343
Gf.C8:6?	EG or MG?	?	?	?	?	? (Cf. Whitley 1991, 202)
Gf.C8:7?	EG or MG?	?	?	?	?	? (Cf. Whitley 1991, 202)
Gf.M17:3?	EG or MG?	?	?	?	?	? (Cf. Whitley 1991, 202)
Gf.N16:3 ⁹⁴ , 南のストア I, 1955	G (EG or MG?) ⁹⁵	火葬	火葬骨壺 (アソフオラ)	?	?	Thompson 1956, 49
Gf.AR? (Disturbed cremation burial), アレイオス・パズス, 1897	G (EG or MG?) ⁹⁶	火葬	?	?	少なくとも土器 1	Smithson 1974, 349-350

Gr.AR? [?] (Robbed cremation burial), アレイオス・パズス, 1897	? (EG or MG?) ⁹⁷	火葬	? (墓壇の大きさは0.75 × 0.40m)	?	?	Smithson 1974, 350
Gr.G12:11(XVII), トロス周辺	MG ⁹⁸	土葬	? (方位は北東-南西)	?	少なくとも土器 2	Young 1939, 75-76, Brann 1962, 127
Gr.I18:1, アレイオス・パズス, 1947	MG	土葬 (伸展葬)	周石墓 (残存部は1.0 × 0.8m 前後、板石で蓋)	14歳女性	土器 18 (そのうち2個は手づくね)、鉄片 1、鉄製ピン 2、小型石板 1	Thompson 1948, 158-159, pl.41.1, Smithson 1974, 352-359
Gr.I18:2, アレイオス・パズス, 1932	MG	火葬	土壇墓 (1.10 × 0.70m, 方位東-西)	?	土器 6 (1個は手づくね) + 3? (破片か出土)	Thompson 1948, 159, Smithson 1974, 359-362
Gr.I18:3, アレイオス・パズス 北斜面麓, 1932	MG	火葬	周石墓 (0.80 × 0.40m 前後)	45-50歳 前後の女性 ⁹⁹	土器 10、犬の骨	Shear 1933, 470, Thompson 1948, 159, Smithson 1974, 362-365
Gr.N21:6, アレイオス・パズス 北東斜面麓 ¹⁰⁰ , 1939	MG ¹⁰¹	土葬	土壇墓	?	土器 3	Shear 1940, 292, Brann 1960, 412-413, Brann 1962, 130, Immerwahr 1971, 158
Gr.ARI, アレイオス・パズス, 1897	MG	火葬	火葬骨壺 (アソフオラ、アソフオラの蓋としてスキュフオス)	?	土器 8 (+ 2? ¹⁰²)、球状土製品 (直径 5 cm) 1	Smithson 1974, 334-340
Gr.ARIII/IV, アレイオス・パズス, 1897	MG	火葬	土壇墓 (1.25 × 0.55m 前後、礫石の層で蓋)	? ¹⁰³	土器 8 ¹⁰⁴ 、土製ビーズ 25	Smithson 1974, 343-347
Gr.ARV, アレイオス・パズス, 1897	MG	火葬	土壇墓 (1.0 × 0.55m 前後)	?	土器 (少なくとも) 5、おそらく鉄製の剣 1	Smithson 1974, 347-349
Gr.B20:5, アレイオス・パズス 西方	LG	?	?	?	少なくとも土器 1?	Young 1951a, 83, Brann 1962, 30, no.2, 125

キリシタン墓の分布と埋葬状況の調査 (一) アンチキのキリシタン (埋葬)

Gr.B21:2, アレイオス・パゴス 西方	LG	土葬 (伸展葬)	土壙墓 (方位は南一北、頭蓋骨は南)	成人女性 か?	土器 3	Young 1951a, 85-86, Gr.2, Brann 1962, 125
Gr.B21:10, アレイオス・パゴス 西方	LG	土葬	土器棺墓 (棺はアンフォラ)	幼児 (18ヶ月)	?	Young 1951a, 82-83, Gr.1, Brann 1962, 125
Gr.B21:23, アレイオス・パゴス 西方	LG	土葬?	?	?	少なくとも土器 8 (1個は手づくね土器)	Young 1951a, 83-85, Brann 1962, 4f, no.125, 125
Gr.D16:3 (XXXVIII), 1949	LG	土葬	ピソス墓 (棺は大型粗製ピソス、遺体はピソスの底に横に倒された状態で安置、板石で蓋)	乳児 (生後2又は10ヶ月 ¹⁰⁵)	棺の外から手づくね土器 (粗製土器) 1、内側から土器 8	Thompson 1950, 330-331, Brann 1962, 39, no.73, 48, no.135, 56, no.220, 67, no.319, 72, no.368, 125
Gr.E14:4(XXXIII), 「トロスの墓域」の 南西方向	LG	?	土壙墓? (1.62 × 0.52m、方位は北東一南西)	?	少なくとも土器 1	Young 1939, 99-100, Brann 1962, 50, no.154, 126
Gr.E14:13(XXV), 「トロスの墓域」の 南西方向, 1934	LG	土葬 (伸展葬)	土壙墓 (2.10 × 0.68m、方位は南西一北東)	未成年 ¹⁰⁶ (身長 1.34 m) ¹⁰⁷	土器 4 (そのうち 1 個は手づくね)	Shear 1935, 359, 364-365, figs.20-21, Young 1939, 101-103, Brann 1962, 58, no.231, 126
Gr.E18:1, アレイオス・パゴス 北西斜面 ¹⁰⁸	LG	土葬 (伸展葬)	土壙墓 (墓域は長方形、一部損壊、残存部は 1.30 × 0.43m、深さ 0.80m 前後、方位は北一南、頭部は北)	成人男性 (50 歳前後)	土器の蓋 1 ¹⁰⁹	Brann 1960, 411-412, Brann 1962, 126
Gr.E19:1, アレイオス・パゴス 北西斜面, 1939	LG	土葬 (伸展葬 ¹¹⁰)	土壙墓 (墓域は長楕円形に近い長方形、2 × 0.58m、方位は東一西)	成人男性 (40 歳前後)	土器 2	Shear 1940, 271, Brann 1960, 408-409, Brann 1962, 50, no.153, 126

Gr.E19:2, アレイオス・パピオス 北西斜面, 1939	LG	土葬	土壙墓 (頭部は東、墓の半分は 損壊、残存部は0.50× 0.57m)	子供(6歳 前後) ¹¹¹	土器1、青銅製腕輪2、小 型鉄製品 ¹¹² 、ガラス製ビ ーズ1、馬型土製品1	Shear 1940, 271, Brann 1960, 409-411, Brann 1962, 126
Gr.E19:3, アレイオス・パピオス 北西斜面, 1939	LG	土葬 (伸展葬)	土壙墓 (墓壇は長楕円形に近い長 方形、1.70×0.55m、深さ 0.38m、方位は南-北)	成人男性 (24歳前後)	土器6、鉄製ナイフ1、ス カラベ1 ¹¹³	Shear 1940, 271-272, Brann 1960, 403-406, Brann 1962, 47, no. 130, 60, no.249, 126
Gr.G12:2(VII), 「トロスの墓域」	LG	土葬	土器棺墓 (アソフオラが棺)	子供	土器8(そのうち1個は手 づくね(粗製)土器)	Young 1939, 31-34, Brann 1962, 54, no. 193, 127
Gr.G12:3(VIII), 「トロスの墓域」	LG	おそらく 土葬	土器棺墓 (アソフオラが棺、他のア ソフオラ2個の底部破片で 蓋)	? ¹¹⁴	手づくね(粗製)土器1個 (おそらく破壊のため他は 紛失) ¹¹⁵	Young 1939, 34-36, Brann 1962, 127
Gr.G12:4(IV), 「トロスの墓域」	LG	土葬	土器棺墓 (アソフオラが棺、粗製土 器片で蓋、板石2枚で覆い、 さらにその上に礫石多数)	子供	無し(棺を覆う礫石の層か らLGのアソフオラの土器 片が出土)	Young 1939 24-26, Brann 1962, 70, no. 344, 127
Gr.G12:7(XIX), 「トロスの墓域」, 1935	LG	土葬 (伸展葬)	土壙墓 (G12:8号墓と同じ墓壇の 上層部、ローマ時代に破壊、 幅は0.59m、方位は北西- 南東、頭蓋骨は北西)	男性	少なくとも鉄製ナイフ1	Shear 1936, 28-29, Young 1939, 93-94, Angel 1945, 306, no. 86, Brann 1962, 127
Gr.G12:8(XX), 「トロスの墓域」, 1935	LG	土葬 (伸展葬)	土壙墓 (G12:7号墓と同じ墓壇の 下層部、ただし頭蓋骨は南 西)	おそらく女 性か? ¹¹⁶	土器7	Shear 1936, 28-29, Young 1939, 94-97, Brann 1962, 36, no. 45, 52, no.171, 127
Gr.G12:9(XVIII), 「トロスの墓域」	LG	土葬	土壙墓 (1.75×0.76-0.95m、板 石で蓋、頭蓋骨は南東)	女性 ¹¹⁷	土器7、環状土製品1、青 銅製指輪3、鉄製ナイフラ 4、青銅製ナイフラ1	Young 1939, 87-93, Brann 1962, 127

ギリシアにおける初期鉄器時代の銅器 (一) マナケのイコラ (複製)

Gr.G12:10(VI), 「トロスの墓域」	LG	土葬	土器棺墓 (棺はアンフオラ、把手が二つ付いた皿状の土器で蓋)	子供 (幼児?) ¹¹⁸	土器 4 (1個は手づぐね(粗製) 土器 1)	Young 1939, 28-31, Brann 1962, 127
Gr.G12:12(XIII), 「トロスの墓域」, 1935	LG	土葬	? (頭蓋骨は北東)	成人 (男性 ¹¹⁹)	少なくとも土器 1 ¹²⁰	Shear 1936, 25-27, Young 1939, 67-71, Brann 1962, 36, no. 44, 65, no.304, 127
Gr.G12:13(XV), 「トロスの墓域」	LG	?	? (埋葬に関連すると推測されるアンフオラの頸部とその蓋としてはめ込まれていた土器 (カンタロス) のみが出土、G12:12号墓の遺物の可能性もあるが、確認は不可能)	? 成人 男性 ¹²¹	?	Young 1939, 73-75, Brann 1962, 52, no. 170, 69, no.334, 127
Gr.G12:14(IX), 「トロスの墓域」	LG	土葬	ピソス墓 (ピソスは板石で蓋)	幼児 2 人 (恐らく同時に埋葬)	土器 17 (1個は手づぐね(粗製) 土器)、青銅製指輪 1、獣骨	Young 1939, 36-41, Brann, 36, no.46, 37, no.57, 39, no.72, 52, no.172, 54, no.190, no.191, 127-128
Gr.G12:15(XIV), 「トロスの墓域」	LG	土葬 (伸展葬)	土壙墓 (2.12 × 0.46m)	成人 (男性? ¹²²)	土器 2	Young 1939, 71-73, Brann 1962, 41, no. 87, 128
Gr.G12:16(X), 「トロスの墓域」	LG	土葬	土器棺墓 (棺はヒュボリア、カッツで蓋)	幼児	土器 2 (1個は手づぐね(粗製) 土器)	Young 1939, 42-44, Brann 1962, 35, no. 37, 53, no.177, 128
Gr.G12:17(XVII), 「トロスの墓域」, 1935	LG	土葬 (伸展葬)	土壙墓 (墓壇はほぼ長方形, 1.81 × 0.64m, 頭蓋骨は北西)	女性 ¹²³	土器 22 (3個は手づぐね 土器)、小型円形土製品 1、青銅製指輪 2、青銅製ピソ 1、青銅製フイアラ 1、鉄製フイアラ 5	Shear 1936, 30-31, figs.28-30, Young 1939, 76-87, Brann 1962, 60-61, no. 250-269, 128

G12:19(XII), 「トロスの墓域」	LG	墓として番号を与えられていない ("Remains of a sacrificial pyre", Young 1939, 55)。		Young 1939, 55-67, Brann 1962, 31, no.12, 69, no.336-338, 71, no.356, 128	
Gr.G12:24(XI), 「トロスの墓域」	LG	土葬 (伸展葬) 土壇墓 (頭蓋骨は北東)	男性	土器 16、鉄製ナイフ 1、 女性像(ブイギユリソ) 1、 ブイギユリソ破片 1	Young 1939, 44-55, Angel 1945, 306, no.84, Brann, 1962, 31, no.11, 52, no.173, 128
Gr.N11:1 ¹²⁴ , オデイオン東方, 1952	LG ¹²⁵	土葬 (伸展葬)	子供 (10歳) ¹²⁷	土器 4	Thompson 1953, 39, Brann 1960, 413-414, Brann 1962, 129
Gr.G12:5(V), 「トロスの墓域」	LG/ Proto- attic ¹²⁸	土葬 土器棺墓 (棺はヘユドリテ)	幼児	土器 2	Young 1939, 26-28, Brann 1962, 127
Gr.Q17:6	LG/ Proto- attic ¹²⁹	土葬	乳児 (1ヶ月)	棺の外に土器 4	Brann 1960, 414-416, Brann 1962, 37, no. 58, 38, no.65, 54, no. 192, 130
Gr.E14:12(XXXIV), 「トロスの墓域」の 南西方向, 1934	? ¹³⁰	土葬 ¹³¹	? ¹³²	無し	Shear 1935, 359, 364, fig.20, Young 1939, 100-101, Brann 1962, 126
Gr.F-G12:3(XXI), 「トロスの墓域」	? (G?) ¹³³	土葬	女性	? 土壇墓 (2.15 × 0.63m. 頭蓋骨は 北東)	Young 1939, 98, Brann 1962, 126-127 ¹³⁴
Gr.G12:25(XXII), 「トロスの墓域」	?	土葬	男性?	? 土壇墓 (古代に破壊、幅 0.30m, 方位はほぼ東-西、頭蓋骨 は西)	Young 1939, 98, Brann 1962, 128
Gr.O7:1(XXXV) ¹³⁵ , テオラ北東部, 1951	? ¹³⁶	土葬(伸展葬) ¹³⁷	成人	鉄製ピン 1 土壇墓 (板石で蓋、頭部は北) ¹³⁸	Thompson 1952, 108

(註)

- (1) 以下の略記を使用する。EG: Early Geometric, Gr.: Grave, LG: Late Geometric, MG: Middle Geometric, PG: Protogeometric, SM: Submycenaean.
- (2) この欄で使用する「アゴラ」という言葉は、アメリカの調査隊が発掘を行っている調査区域を示している。
- (3) この欄において方位を記載する際は、それが半明する墓に関しては、頭蓋骨がある方向を先に記した。たとえば報告論文に「北—南」と記載されていても、頭蓋骨が南にある場合には「南—北」と修正した。
- (4) しばしば火葬用骨壺の上に蓋として土器が乗せられていることがあるが、完形品などの場合にはかかる土器も副葬品の1つとして数に入れる。明らかた蓋として準備されたであろう破片の類は除く。
- (5) 墓の番号に関しては、Styrenius 1967, 31, 165, Whitley 1991, 201.
- (6) ただし報告ではヘフアエオトス神殿ではなく、テセイオソと記されている (Shear 1937, 364).
- (7) “Agora Grave IV was a small pit grave, which was partly lined with stones supporting cover slabs” (Styrenius 1967, 35).
- (8) “the grave of a small child” (Shear 1937, 364).
- (9) この墓を原幾何学文様期に分類する研究者も存在する (Langdon 2007, 183, Table 9.1)。年代決定の鍵となるこの墓の土器に言及がある他の文献として、Ruppenstein 2007, 61, 72.
- (10) この墓から出土した土器を“Final Mycenaean/Submycenaean”と記す文献がある一方で (Papadopoulos, Vedder & Schreiber 1998, 516, fig.6, 517)、垂ミケーネ期から原幾何学文様期への移行期と見なす研究者も存在する (Lemos 2002, 230)。
- (11) おそらく垂ミケーネ期の墓 J2:11 の近く (0.75m の距離) から発見されたことがその根拠であるうが、垂ミケーネ期の可能性が示されている (Camp 1999, 265, n.14)。
- (12) 遺物の図面や写真が公表されていない。ここでは年次報告の記載に従っておく (Shear Jr. 1997, 514)。
- (13) この土器 (レキエトス2個) に関する文献として、Ruppenstein 2007, 49, 59.
- (14) 墓の番号に関しては、Styrenius 1967, 76, Whitley 1991, 201.
- (15) ただし遺物の図面や写真などは公開されていない。ここでは調査の年次報告に従った (Thompson 1953, 41-42)。根拠は不明であるが、ステュレニアスはこの墓を垂ミケーネ期から原幾何学文様期への移行期としている (Styrenius 1967, 76)。レモスはステュレニアスに依拠して「?SMEPG」という区分に、一方モリスとウイットリは垂ミケーネ期に分類している (Morris 1987, 228, Whitley 1991, 201, Lemos 2002, 230)。
- (16) Cf. Styrenius 1967, 76.
- (17) Cf. Styrenius 1967, 76.

- (18) 『ヘスペリヤ』第7巻の325頁には、1937年に発掘区 Phi から3基の原幾何学文様期の墓が出土したという報告がある (Shear 1938, 325)。そのうちの1基は火葬墓と記されている。これらの3基のうち、報告論文の年代とは異なり、1～2基を垂ミケーネ期と見なす意見が優勢である。ステュレニアスは土葬墓2基を垂ミケーネ期と判断している (Styrenius 1967, 31, Agora Grave II [M16-17:1], Agora Grave III? [N16:1])。マウントジョイはこの記述に従っているが (Mounjoy 1995, 65, n.252, n.253)、ただし後者のN16:1号墓は、ステュレニアス自身が疑問符を付している通り、他の資料と異同している可能性がある (N16:1という未発表の垂ミケーネ期の墓が存在するらしい。Cf. Whitley 1991, 206.)。
- 一方マウントジョイは1基 (M16-17:1) を垂ミケーネ期、2基 (J9:1 および M17:2) を原幾何学文様期と分類している (Whitley 1991, 201, 202)。さらに原幾何学文様期に焦点を当てたレモスの著作においては、XL (J9:1) 号墓と XVI (M17:2) 号墓の2基が後期原幾何学文様期と言及されており、そのうち XL (J9:1) は骨壺を伴わない火葬墓であるという (Lemos 2002, 153-154, n.21, 230)。
- 情報が継続している上に遺物の写真や図面が掲載されていないことから、筆者には現段階においてはこれらの墓の番号や年代に関して必ずしも十分な確信があるわけではないことを明記しておきたい。
- (19) この墓から出土した土器 (レキュトス) を “Final Mycenaean/Submycenaean” と記す文献もある (Papadopoulos, Vedder & Schreiber 1998, 516, fig.7)。
- (20) Cf. Angel 1945, 301, no.54, 身長は 1.65m (Shear 1939, 325)。
- (21) Cf. Mounjoy 1995, 65。
- (22) Cf. Styrenius 1967, 82, 83。
- (23) Cf. Styrenius 1967, 82, 83。
- (24) マウントジョイは原幾何学文様期に分類している (Whitley 1991, 202)。
- (25) Cf. Styrenius 1967, 70, 71。
- (26) “simply laid out on its back” (Shear 1975, 373)。
- (27) 大型のアンフォラが遺体にかぶせられていた。副葬品としても解釈しうるが、同時に墓の蓋としての役割も果たしていたと推察される (Shear 1975, 373-374)。
- (28) 調査の年次報告では垂ミケーネ期から原幾何学文様期にかけての移行期と記されている (Holloway 1966, 83)。垂ミケーネ期 (Styrenius 1967, 59) と原幾何学文様期 (Morris 1987, 228) とに意見が分かれていると言えよう。遺物の図面や写真は公表されていない。ここでは年次報告に従っておく。
- (29) 墓の番号および年代に関しては、Gr.M16-17:1? の註を参照。

キムントロワの採掘結果報告の類編 (一) トロワのトロワ (複製)

- (30) ウェットリによれば (Whitley 1991, 201)、これはスミスソンの文献で 54 号墓と記されている墓である (Smithson 1961, 178)。
- (31) Cf. Styrenius 1967, 104, diagram 7.
- (32) 墓の番号に関しては、Styrenius 1967, 88, Whitley 1991, 202.
- (33) 骨壺の蓋として使用されていた土器を副葬品と見なした。
- (34) Cf. Styrenius 1967, 109.
- (35) “trench-and-hole type” とあるので、おそらく火葬骨壺であろう (Styrenius 1967, 91)。
- (36) Cf. Styrenius 1967, 107, 109-110.
- (37) 墓の番号に関しては、Lemos 2002, 230.
- (38) Cf. Styrenius 1967, 95, 96.
- (39) Cf. Styrenius 1967, 104, 108, 109.
- (40) 墓の番号に関しては、Styrenius 1967, 90, Lemos 2002, 230. ウェットリによれば、この墓はスミスソン論文に掲載されたアゴラの墓のリストの第 41 号墓であるという (Smithson 1961, 178, Whitley 1991, 202)。
- (41) 墓の構造に関しては、Styrenius 1967, 91-92.
- (42) 調査の年次報告では、骨壺として使用されたアンフォラの中から小型のカップの底部が 1 個出土したと記されている (Shear 1937, 368)。他の文献ではこの墓の副葬品としてレキユトス 6 個とピュクス 2 個という言葉がある (Styrenius 1967, 104, diagram 7)。とすると、最低でも 9 個の土器が副葬されていたことになる。
- (43) “two iron brooches” (Shear 1937, 368). フイゾラのことである。
- (44) 墓の番号に関する註で記したとおりもしもこの墓がスミスソン論文の第 41 号墓であるならば、さらに手づくねピュクスなどの副葬品が出土した可能性がある (Smithson 1961, 172, no.54, 178, pl.30, Agora P6695)。
- (45) レモスのこの文献によれば、C9:14 号墓はスミスソン論文に掲載されたアゴラの墓のリストに含まれる遺構の一つであるという (Smithson 1961, 178)。
- (46) 墓の番号に関しては、Styrenius 1967, 89, Lemos 2002, 230. またウェットリによればこの墓はスミスソン論文に掲載されたアゴラの墓のリストにおける 21 号墓であるという (Smithson 1961, 178, Whitley 1991, 202)。
- (47) Cf. Styrenius 1967, 95.
- (48) 調査の年次報告では、成人の墓と記されている (Shear 1937, 368)。ただし遺骨が残っておらず、それがゆえに子供の墓ではないかと推測する研究者もいる (Styrenius 1967, 95)。
- (49) 墓の番号に関しては、Lemos 2002, 230. Cf. Whitley 1991, 202. この墓を 20 号墓と記す文献も存在する (Smithson 1961, 178)。

- (50) 亜ミケーネ期と記載する文献もあるが (Styrenius 1967, 32, Whitley 1991, 201)、マウントジョイによればアゾラの記録文書では原幾何学様期とされているという (Mountjoy 1995, 65-66, n.255)。遺物が公表されていないので、筆者独自の判断を下すことは不可能である。
- (51) ウィットリによれば、E12:1号墓はスミソン論文のアゾラの墓のリストにおける22号墓であるという (Smithson 1961, 178, Whitley 1991, 202)。
- (52) 墓の番号に関する註で記したようにもしもこの墓がスミソン論文の22号墓であるならば、少なくとも土器1個が副葬されていた (Smithson 1961, 158, no.8, 178)。
- (53) 番号に関しては、Lemos 2002, 230。
- (54) ただしヘンライヌス神殿ではなく、テセイオンと記載されている (Shear 1937, 364)。
- (55) 墓の番号に関してはレモスに従った。レモスはこの墓をXVI号墓と同一と記している (Lemos 2002, 230)。ただしデズボロはおそらくF16:3号墓と思われる墓をXVII号墓と記載している (Desborough 1952, 108, 308)。
- (56) 骨壺の蓋として使用されていた土器を副葬品と見なした。
- (57) “two large brooches” (Shear 1933, 470)。おそらくフイアラであろう (Cf. Desborough 1952, 308)。
- (58) 墓の番号に関しては、Lemos 2002, 230, cf. Whitley 1991, 202。
- (59) 遺物が公にされていないので、現段階では筆者自身が結論を下すことは不可能である。ただしこの墓がF16:3号墓の近くで発見され、さらには同様の特徴を有していることから、原幾何学文様期の可能性はあると思われる (Shear 1933, 468)。また未発表の調査資料を閲覧しているウィットリ、ほかにもレモスが原幾何学文様期と記していることも考慮に入れた (Whitley 1991, 202, Lemos 2002, 230)。
- (60) 墓の番号に関しては、Styrenius 1967, 90, Lemos 2002, 230。
- (61) レモスのこの文献によれば、この墓は『ヘスベリア』第7巻に記載があるものだという (Shear 1938, 325)。『ヘスベリア』第7巻の当該頁に関する記載に関しては、Gr-M16-17:1?の註を参照。
- (62) 墓の番号および年代に関しては、Gr-M16-17:1?の註を参照。もしかしたらこの墓がM17:2(XVII)号墓の可能性があるかもしれない (Styrenius 1967, 95, Lemos 2002, 153-154, n.21)。
- (63) レモスのこの文献によれば、O7:6号墓はスミソン論文に掲載されたアゾラの墓のリストに含まれる遺構の一つであるという (Smithson 1961, 178)。ただし番号は不明である。
- (64) 墓の番号に関しては、Styrenius 1967, 90, Lemos 2002, 230。
- (65) Styrenius 1967, 96。

- (66) 墓の番号に関しては、Siyrenius 1967, 89, レモスによると、この墓はヌミスソソによるアゴラの墓のリストのうちの一つであるという。ただしどの墓なのかは記されていない (Lemos 2002, 230, Smithson 1961, 178)。
- (67) Cf. Siyrenius 1967, 96.
- (68) Cf. Siyrenius 1967, 102, 108.
- (69) 墓の番号に関しては、Siyrenius 1967, 89, Lemos 2002, 230.
- (70) 墓の番号に関しては、Siyrenius 1967, 89, Lemos 2002, 230.
- (71) Cf. Siyrenius 1967, 95.
- (72) Cf. Siyrenius 1967, 102, 108.
- (73) T15-2号墓とは Im も離れていない (Shear Jr. 1973, 399)。
- (74) 墓の番号に関しては、Blegen 1952, 279, Whitley 1991, 203.
- (75) 骨壺が一般に女性用と見なされている肩の部分に二つの把手があるタイプであるため、女性の墓と推察されている (Coldstream 1977, 26, 27, fig. 1e)。
- (76) 21 個の土器が報告されており、そのうちの 1 個は骨壺 (アソフオラ) であるため、副葬品は 20 個である (骨壺の蓋として使用されていたビュクスも副葬品に含めた)。さらに、報告されていない 3 個の土器の小片が発見されているという (Young 1949, 283, n.25)。
- (77) おそらくここは金 (electrum) と報告されている (Young 1949, 297, no.25)。S. ランゲドンはこの遺物を “Hair Spiral” の項目に分類している (Langdon 2007, 183, Table 9.1, 2008, 132, Table 3.1)。
- (78) D16:2号墓の 3m ほど東方 (Blegen 1952, 279)。
- (79) ただし人骨は部分的に焼けた状態であった (Blegen 1952, 282)。
- (80) “Javelin point or small chisel” (Blegen 1952, 289, no.7)。
- (81) “Loop or hasp with ends bent out flat at right angles to longitudinal axis of loop” (Blegen 1952, 290, no.10)。
- (82) 副葬品の土器 (ビュクス) の蓋のつまみではないかと推測されている (Blegen 1952, 290, no.14)。
- (83) カイットリによればこの資料はヌミスソソ論文のアゴラの墓のリストに記載されているもの一つであるという。ただしその何番の墓かは不明である (Smithson 1961, 178, Whitley 1991, 202)。
- (84) おそらく未発表資料であり、詳細は不明。コールドストリームに導かれた (Coldstream 1968, 10, 2008, 10)。
- (85) “Cemetery Deposit” (Coldstream 1968, 10, 2008, 10), “not a proper grave” (Whitley 1991, 202)。
- (86) 骨壺は含めていないが、その蓋として使用されていたカッツは副葬品と見なした。

- (87) 墓の番号に関しては、Whitley 1991, 203.
- (88) 年次報告では墓の年代に関する詳細な記載はなく、遺物も公表されていない。ここではコールブストリームの意見に従った (Coldstream 1968, 10, 2008, 10)。
- (89) “a small iron saw and knife” (Thompson 1956, 48).
- (90) 墓の番号に関しては、Coldstream 1968, 14, 2008, 14, Whitley 1991, 203.
- (91) 身長は 1.69m。この人骨の鑑定に関しては、Little & Papadopoulos 1998, 376-378, n.8.
- (92) 遺体の足付近から初期幾何学文様期の土器が一個発見された。副葬品の可能性が高いという (Little & Papadopoulos 1998, 379)。
- (93) このやり先は破壊されたミケーネ時代の墓から持ってこられたものと推測されている (Smithson 1974, 342, ARII-3)。
- (94) 墓の番号に関しては、Whitley 1991, 203.
- (95) 年次報告においては幾何学文様期の土器が出土したと記されているが、詳細は不明 (Thompson 1956, 49)。ウイットリはこの墓を EG-MGI の項目に分類している (Whitley 1991, 203)。
- (96) 幾何学文様期の土器片が出土したと記されているが、それ以上の詳細な年代は不明 (Smithson 1974, 350)。ただし、同時に報告された他の墓が EG または MG なので、この墓もそのどちらかの時期である可能性は否定できないと思われる。ウイットリもそのように判断している (Whitley 1991, 203)。
- (97) 同時に報告された他の墓が EG または MG なので、この墓もそのどちらかの時期である可能性は否定できないと思われる。ウイットリもそのように判断している (Whitley 1991, 203)。
- (98) Cf Coldstream 1968, 21, 2008, 21.
- (99) 関節炎を患っていたという (Smithson 1974, 362)。
- (100) ミケーネ時代の岩室墓 (N21-22:1) の羨道の上から発見 (Shear 1940, 279, fig.15, Immerwahr 1971, pl.80)。
- (101) 年次報告では “late Geometric” と記されているが (Shear 1940, 292)、中期幾何学文様期であろう (Coldstream 1968, 22, 2008, 22)。
- (102) Cf Smithson 1974, 339-340.
- (103) 副葬品から女性の墓ではないかという推測がなされている (Smithson 1974, 343)。
- (104) カタログでは ARIII/IV-1 から ARIII/IV-9 までであるが、ARIII/IV-7 および ARIII/IV-7bis. は除外した (Smithson 1974, 343-346)。
- (105) 生後 2 ヶ月前後と記す文献として、Brann 1962, 125, 10 ヶ月前後と記す文献として、Thompson 1950, 330.

ギンハトヒワチハクニ野原墓群並之の類蓋 (一) トトキスハコト (埴埴)

- (106) “The grave of a youth” (Young 1939, 101), “Skeleton of youth” (Brann 1962, 126).
- (107) ただし頭からくるぶしまでの数字であり、また頭を傾げた状態 (Young 1939, 101, Brann 1962, 126)。
- (108) 1939年に発見された後期幾何学文様期の3基の墓の近くで1947年に発見されたという同時期の墓がおそらくこれであろう (Young 1949, 277, n.7)。
- (109) 覆土から後期幾何学文様期の土器片が出土 (Brann 1960, 411)。
- (110) 筆者が写真から判断した (Brann 1960, pl.88)。
- (111) 年次報告では少女 (young girl) と記されている (Shear 1940, 271)。おそらく副葬品からの推測であろう。
- (112) “Riveted iron binding” (Brann 1960, 410, no.3)。
- (113) 当初調査の年次報告においてはフレイアブンス製と記載されていたが (Shear 1940, 271)、その後の論文ではガラス製 (sky-blue frit) とされている (Brann 1960, 406, no.8)。
- (114) この墓は一部破壊されており遺骨は出土していないが、幼児の墓と記載されている (Young 1939, 34)。
- (115) 棺ないしは骨壺の蓋として使用された土器も副葬品に数えることにしているが、この墓の場合には底部の破片が蓋として使用されており (完形品ではないので)、副葬品とは見なしえない。
- (116) 副葬品からの推測であって、人骨の鑑定結果ではない (Young 1939, 94)。
- (117) 19歳の女性と記す文献がある (Langdon 2007, 183, Table 9.1, 2008, 133, Table 3.1)。
- (118) “small child” (Young 1939, 28)。
- (119) 男性と記載されているが、根拠は不明。
- (120) 管が通った著名なオイノユエ。Cf. Fraser 1940, Papadopoulos 1999, Dahm 2007。
- (121) フンフオラとカンタロスの組み合わせからの推測であり、人骨鑑定による結果ではない (Young 1939, 73)。
- (122) 男性と記載されているが、理由は不明 (Young 1939, 71, Brann 1962, 128)。
- (123) 副葬品からの推測 (Young 1939, 78)。年齢を15歳と記す文献がある (Langdon 2007, 183, Table 9.1, 2008, 133, Table 3.1)。
- (124) 井戸 N11.5の上部に設けられていた (Thompson 1953, 39, Brann 1960, 413)。この墓の付近からはほかに2体の遺骨が発見された。おそらく破壊された墓の被葬者と推察されるが、それらがこの墓と同時期か否かは不明 (Brann 1960, 413, Brann 1962, 129)。
- (125) コールドストリームはこの墓を “Subgeometric, contemporary with Early Protoattic” という項目に分類している (Coldstream 1968, 84, 2008, 84)。
- (126) 墓の東方から複数の石が出土。この墓と関連がある可能性もあり (Brann 1960, 413, Brann 1962, 129)。

- (127) 少女と記載されているが、その根拠は不明である (Thompson 1953, 39, Brann 1962, 129)。
- (128) コールブストリームはこの墓を “Subgeometric, contemporary with Early Protoattic” という項目に分類している (Coldstream 1968, 84, 2008, 84)。
- (129) コールブストリームはこの墓を “Subgeometric, contemporary with Early Protoattic” という項目に分類している (Coldstream 1968, 84, 2008, 84)。
- (130) 遺物が出土していないので、正確な年代は不明。ただし LG の墓に関する報告書に記載されており (Young 1939, 100-101, Gr.XXIV)、ウイットリもこの墓を LGII 期に分類している (Whitley 1991, 204)。
- (131) 足の骨は出土していないにもかかわらず、屈葬の可能性が推測されている (Young 1939, 101, Brann 1962, 126)。
- (132) グラウンによればこの被葬者は、『ヘスベリア』第 14 巻に掲載された人骨に関する報告の 85 番であるという。もしもそれが正しいければ、女性であると結論されている (Angel 1945, 306, no.85, Brann 1962, 126, E14:12)。
- (133) 副葬品は出土していない。周辺で発掘された同様の墓の年代から幾何学文様期と推測されている (Young 1939, 98)。ウイットリは疑問符付きで LGII 期に分類している (Whitley 1991, 204)。
- (134) ここでのグラウンの記載によればこの墓の人骨に関しては、Angel 1945, 305, no.82 (ただし、XXI 号墓ではなく XXXI 号墓と記されている)。
- (135) 墓の番号に関しては、Styrenius 1967, 76。
- (136) 調査の年次報告では胚ミケーネ期と報告されており (Thompson 1952, 108)、それに従う研究者もいる (Styrenius 1967, 76, Whitley 1991, 201)。しかしグラウンによれば、アエラの調査記録ではミケーネ時代または幾何学文様期と記載されているという。さらにグラウンによれば、鉄製品が出土していることからミケーネ時代よりは幾何学文様期の可能性を指摘している (Mounjoy 1995, 65, n.255)。目下のところ墓に関しても唯一の副葬品である鉄製ペンに関しても写真や図面が公表されておらず、判断を下す材料が存在しない。
- (137) Cf.Styrenius 1967, 80。
- (138) Cf.Styrenius 1967, 79。

ギリシアにおける初期鉄器時代の遺跡 (一) アテネのイコロ (高橋)

表 2 現今の公表資料にもとづくアコロの墓出土の武具および刃物類

墓	年代 ¹	鉄製武具および刃物類				青銅製武具および刃物類				
		剣	やり先	ナイフ	その他	合計	剣	やり先	ナイフ	その他
D16:2	EG			1		1				0
D16:4	EG	1	2	2	3	8				0
N16:4	EG(?)	1		1	1	3				0
R20:1	EG	1		1		2				0
ARII	EG	1				1	1 ²			1
ARV	MG	1(?)				1(?)				0
E19:3	LG			1		1				0
G12:7	LG			1		1				0
G12:24	LG			1		1				0

(註)

- (1) 以下の略記を使用する。EG: Early Geometric (初期幾何学文様期)、MG: Middle Geometric (中期幾何学文様期)、LG: Late Geometric (後期幾何学文様期)
- (2) このやり先は破壊されたミケーネ時代の墓から持ってこられたものと推測されている (Smithson 1974, 342, ARII-3)。

表 3 現在の公表データに基づくアゴラの墓出土の金属製装飾品

墓	年代 ¹	鉄製装飾品				青銅製装飾品			
		ファイアラ	ピン	その他	合計	ファイアラ	ピン	その他	合計
C9:3	SM							1	1
I5:2	SM			(1) ²	(1)	4	1	12 ³	17
C9:9	PG	1	1		2 ⁴				?
C9:10	PG	2	2		4 ⁵				?
C9:11	PG	1			1				?
C9:13	PG	2	2		4				0
P9:1	PG				0	1		1	2
F16:3	PG	2	2		4				0
Q8:6	PG		1		1		1 (+1 ⁶)	3	4 (+1)
D16:2	EG				0	2	2		4
D16:4	EG		1		1				0
H16:6	EG		1		1	2	3 (+1 ⁷)	1	6 (+1)
R20:1	EG		1?		1?				0
E19:2	LG				0			2	2
G12:9	LG	4			4	1		3	4
G12:14	LG				0			1	1
G12:17	LG	5			5	1	1	2	4
O7:1	?		1		1				0

ギリシアにおける初期鉄器時代の遺跡 (一) アテネのアゴラ (宮橋)

(註)

- (1) 以下の略記を使用する。SM: Submycenaean (亜ミケーネ期)、PG: Protogeometric (原幾何学文様期)、EG: Early Geometric (初期幾何学文様期)、LG: Late Geometric (後期幾何学文様期)
- (2) 青銅製の指輪に鉄製の (石などをはめるための) 台座が付いていた。
- (3) そのうち一つは鉄製の台座がある青銅製指輪。
- (4) 未発表の墓で他にも遺物がある可能性あり。
- (5) 未発表の墓で他にも遺物がある可能性あり。
- (6) 鉄製のピンだが、青銅製の装飾球が付いていた。
- (7) 鉄製のピンだが、青銅製の装飾球が付いていた。